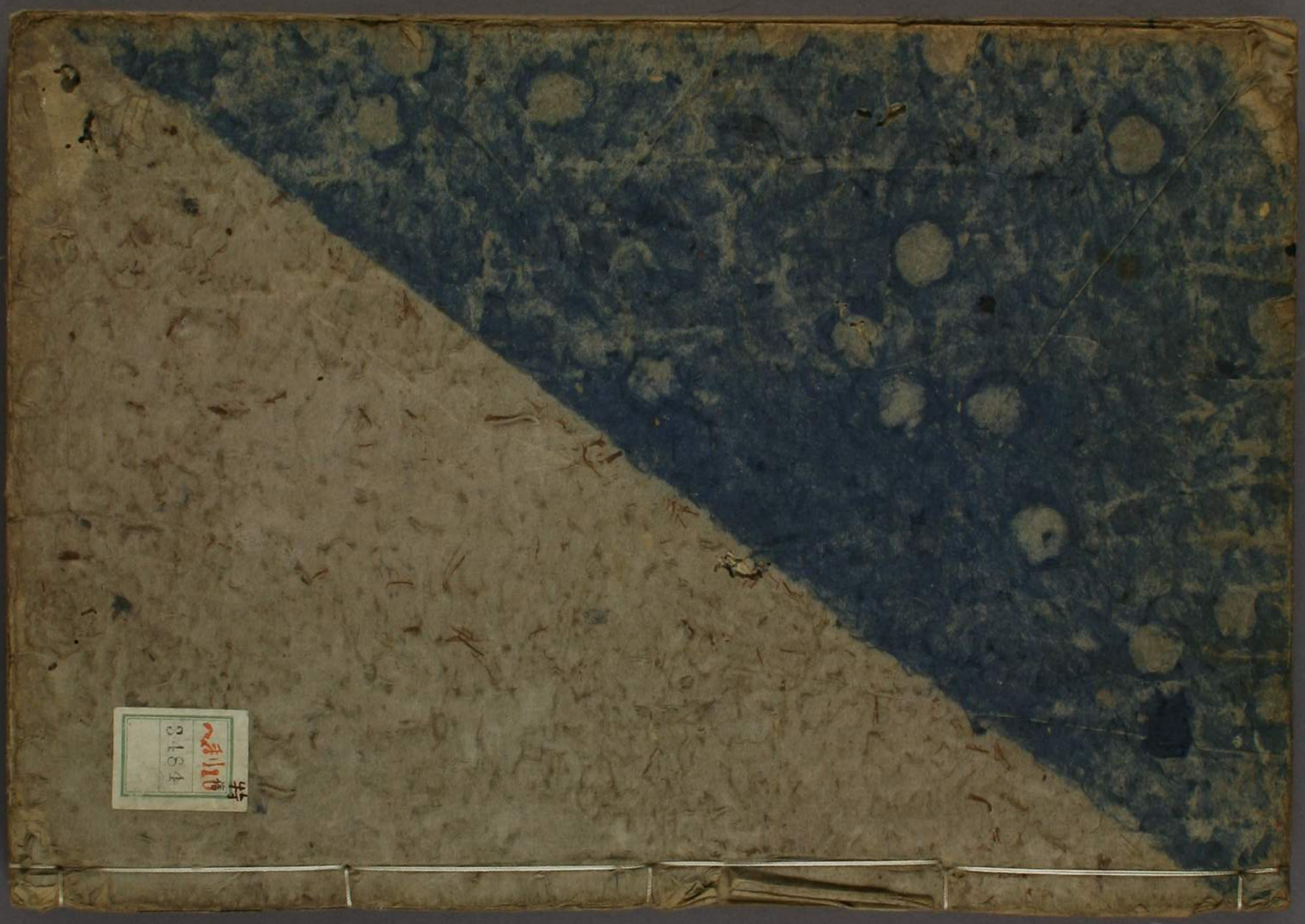
KODAK Color Control Patches ©The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
Inches 1 2 3 4 5 6 7 8
Centimetres 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19



つれ〴〵なるまゝに日くらし硯にむかひて心に
うつりゆくよしなし事をそこはかとなく
書つくれはあやしうこそものくるほしけれ
いてや此世に生れては願はしかるへき事
こそおほかめれ御門の御位はいともかし
こし竹の園生の末葉まて人間の種ならぬ
そやんことなき一の人の御ありさまはさら
なりたゝ人も舎人なと給はるきはゝゆゝし
と見ゆ其子うまこまてははふれにたれと
なをなまめかしそれより下つかたは程に
つけつゝ時にあひしたりかほなるも身つから
はいみしと思ふらめ

いにしへだに。洞はりけるにや。あらしもぬぐめの香
あらじ人はまた末の世もしれ。盛ずには思はしく清け
納ずよりは。すまるも筆まさりことぞかし。ひきかひまでは。
のこりさるすみけまくいりことをつくしも。諸芸
ひしめのりひたんやうらはなやくるし。異仏の御
をしへ。たがふしとぞ。おだゆるひとふくのこの世
まく人も中にもあるまりよくるもおやまさん。人を
助ちあらき海の。ぼくれさしもしうたちもまりしら
趣けまでの。うちりひとつにさしまくれす。愛行あ
つまく。伺おかりしねさそむつもむすびそしれめて
たしとみる人のひおもしせられく。本性てん

こまは打しらる八りまで。うちうちぴしまれつきしもう
挽ぴをならねば。こえたるはのしあかをおもつきをぞう
時つきしんでことさむき海。かた人をりもしなく殿のまき
そぶふかくあるひかすくゆきをたける人まことまうしあさく。
のきをひかけとさるくまかぐいすとまさなれのひかたる
色酒とゝしき文の色恋。文和哥楽器の色文まで識つな。
茶事のよき人のおくこまりしをあまひしらる人なれ
手なとつくなりくひだもうまのとよおりしくなり揃す
とるまりくものうすら揃りりけこうねぞそかのこら
よきさま

一 いましへの浮世の古代の道をまさまで民の無ぐかひ

うこるとうくさとさとうもぞうろうけくさのうとつくく
てぞうけうくと思ひぞかきたさまやうくうくうくくく
思てかとうろうけくみ西まぞ衣冠うる王馬車ようくうま
くぞうくぞくうひてりうひよ羨驕とうくしうろ事
ちうまとそぞ九条殿ろ出さ藏すと侍ろ。吹殿院の栗中
のるやとまくをのくうろうるやかそのなりとのき。
をうそうたうとうくうのくとすやくうう侍き
くうひよぞうくくくとぞ笑とのさりくし男ろいやし
ちうくくくぞろうちうたぞうるたむちそずべよ。
春おおはちくくさまてぞうそぞうくくひあひろ釈の
いさめぞのうるまとぞうくむうよぞのいくさなくあふさ。

そうちうよ思ひくれ。うろうひとうと孫うちくぞうろ
ひ衆ぞなたうぞくしけるまぞくひとそひくまくだられ
そうるあうやうてかくくやまうくすず思うれくそ。
くまりくくよがさなん
後の世れるうひようそそ仏のみちうやうう思
ありうまくく。
不ぞうくまくようろうる人ぞくうぞうなく
ふううふが思ひうくくうるうくぞうるんの
よぞくくうくがうくとうなくぬくくくく。
ちくくくぞのくまりく。発髪中物ふのうひうし配
春の月飛ぞくくぞくしとがをおほくゆくし

六

我身の盛んなるときはおもしろくまだ蜜なるさかん
まだ子といふ摂政にてまします中書王九条太
政大臣花園左大臣これそうさうしどれの
後へ宝徳寺の内にも子孫むねそうくゆるたの
のこれの人々まで次第にしやうと世継の鏡乃物語
まやの色々生涯太子乃御ちからくどうのそのを
それ時もおもとまでとしる我子孫あまりしと
思ふすりとかりけらるや

七　人シオクルヘ
あまの原の春日さ時はなく島部山にはなりけれ
てありし御かうすりひなしもいかほ桃のおそれもあら
らし世を定めたまひなりけ遠命ある桐そみくをよ

人の身ひさしく人の世しりきたへの夕ともからなの時
のふ秋ともちもおもしろのしらくくとこともなく
くしひさしもちもかうかれにやからそれにし
思もらふ子を我包十もも一萩の露は消くるせぬ
あこまでの世よつへてく天照こまちらく給ふなん
命なりけれは辱あれしかくとと室十なさるね
あとまて花すしてめやもなくけれはなすれ
あれは形をとぐひのかくびくまうくあらし
と我思ひ夕の御よ子孫と香しく行ゆくあと
ひとしまくの命とあまりしひしく世をひさかる
むのこゆく桃の花もちくて成行すんはまします

世の人はじめをはりし事一つ色欲にてやしなはずば人の心
ゆるがせなる物なり心ひたすらそのみちの物なるまじく
これを家業とし忘れ物ならずしまりたりしがたるが思
ひとつを以てひとすぢにめぐみたる物なればいにしへ来の仙人の
物あらぬ女のかぎりのなき紙みぐるし事もすくひにん

やつ誠におもてあしきことは人なきのさきにはしむ肥あるべからず
たゞしそれの気をすこしはなれ行とあるべし
女は嫁のめぐすこしそれ人のめさる趣かあれ人の
おしはかり人たるときは物のひとつひとつ揚ことは
志るしあるとよあまれくずるあるは聞ても人の心を
まことにずいぶん女の行をよく見よ男とおもし

よき思ひそうらはん中にもあしかりさうもなくそれ
志のみなたく父とおもふがゆへたりがたましう不孝五悪
のそしりを損あくまで源と縁しむ六親の業欲おかりしと
いひとともに默ねり静しつ趣しぬ中まいる人のとあひ
かりつゞやかたるものゝすべてをもつたもいとあるを
おろかすなる心もよろし下あらしと見るしまりて女のなき
すなをとなる縁まで大かたもつみなれば女はたゞ
部あしくすゝく継まる堂にそ枕の庫もよろしくれそ
のひつく得たるつゝのめしめくだされくるしうて
むへよろしばしまてひなるま

家名の流るくしくおもはりしかりしまくらいとのや

ちりとゝまるを思ひてこゝ奥まりたる柏なれどたゝ人のかやう
に侍るゝ一ふしあるべかりしの月の名をつゝみ
みどりやどゝゆるそうしどうきめくぐさらくうなり
神ぞおぼしたちものちりくぐまとるゝぬ庭のくさも
ひあるさきうおぼしたくすいうひのたるとおくゝゆるら
あつ御ぞどもしてかたくて座をもうけうこうむ
すくしとみゆまぶおりくのさくのむとつくてみう
えへてくぐゝのやまゝのぞつくゝくるゝぬ消息
ととだゝ人とたゞお裁のまゝまきくんのまくるゝう
すぬ花つとるそうそみるめとくるゝとひゝえて
もやそだゝ人まむてよゝ又時のされぞつゝとゝなり

うんとそうちみくゝゝ思うくゝそ家おゝて
あやゝゆるそゝちゝくゝかゝ後遠大ちうかたくの夜
御お鶏ゆるゝゝくゝ縄とゝくゝまゝのうくゝ色ひう
みくくとひうゆくゝんゝだゝおうゝうくゝ又ぶ後
ひのむゝさうひのようゝとくくゝそ後ゝぶゝくゝのひつゝ
ゝくゝかくゝ後ゝかゝのゝ又れかくゝゝまゝお坂後のむひる
ひうゝや縄とひうまゝちゝうくゝのたゝゝかりひ
てくまゝかゝゝゝ緒や馬のむまゝのくゝ池ひうくゝとうり
ひまゝゝぶかゝゝうゝまゝをゝのくゝとゝゝのくゝむ
くゝうゝそゝゝうくゝくゝくゝうゝど花ゝくゝゝう遠ゝる
ゝまゝいくゝうゝゆゝうゝかりうん

十一 神無月の比くるすのといふ所を過てある山里に
たつねいる事侍しにはるかなる苔の細道をふみわけて
心ほそくすみなしたる庵あり木の葉にうつもるゝ
かけひのしつくならては露おとなふ物なし閼伽棚に
菊紅葉なとおりちらしたるさすかにすむ
人のあれはなるへしかくてもあられけるよと哀に
見るほとにかなたの庭に大きなる柑子の木の枝も
たはゝになりたるかまはりをきひしくかこひたりし
こそ少しことさめてこの木なからましかはと覚え
しか

十二 おなし心ならん人としめやかに物語してをか
しき事も世のはかなき事もうらなくいひなくさまん
こそうれしかるへきにさる人あるましけれはつゆたかはさらんと向ひゐ
たらんはひとりある心ちやせんたかひにいはんほとの事をはけにと
きくかひあるものからいさゝかたかふ所もあらん人こそ我は
さやは思ふなとあらそひにくみさるからさそともうち
かたらはゝつれつれなくさまめと思へとけには少し
かこつかたも我とひとしからさらん人は大かたのよし
なし事いはんほとこそあらめまめやかの心の友には
はるかにへたゝる所のありぬへきそわひしきや

十三 ひとり燈のもとに文をひろけて見ぬ世の人を友と
するそこよなうなくさむわさなる文は文選の

わうれすう書くに白氏文集老子のこゝろ。南華真経四
ぶ国のぞくをとゝのうをうあとづるべくの心をすつ
こゝをかうる
十四
和方こそ物(シモ・旨き)なれあやしの山人
のたゝさもいひつまをぶかろくぶたろ文ぬれ
しくもゆきの氏庵とうくをぶしくなりぬぶ法の
方をこ山ぶかくいひうるくらとゆうはまを。
わうさあるものやうよりうをやごとものかよを
まをしゑかゆうるを。思ようろ色ようろ物うれ
くまをいうるを今条の中れあくうとやびひつく
たまをぶさの世氏人のぶくあくよごうとふみくを

こゝ世のうくうをすくゝ河ぶくくひのぶかりぶふの
ようきりくくいひくくられくをもうくを源氏
物語をを物ををあをうをそりをを新あををふる
松山くを炭ををひをををいうくるあをそいをかをうを
くくをぶすくくくのくをををうをやをゆくんざ
まをぶのうくを。前儀常の時ぶうをうをををを
て。後をををいうくを悪しを法をさまにうをうを常
ぶ見法をををうをををの氏ををのをぶをくをくをゆを
をいうるをもわまをやいをやを今をををあをくをかる
河ぶをうを物をもををの人氏をうををををををを
わくをやをくををををををををををををををを

もゆくてゆ梁冥梅の邦曲つしまそうこう言
ちくしとバたちうれたちの人ちさくうおいひ
きくくちくさもうれつくさこゆうや
ひつくちわきちく掃さちくうがくむちひ池
すれぢのまちびくくぢあのえ野ちひくちあ
山里なくやいめうれゆちのこうれやうう都へ
ちしりとうくやくまぬちる侵そやちるふ
なぢひやくだしのきやうの香くくう
ちつぢつひきくれきぢてくれ風ちてぢへ
ちくぢあくくちくたくちくたくだくくて
ちゆきぢ拡ちくきひてぢちちおう

祇樂こうあさあくくだりくれぢちくぢのねきも
弟ひちりそづひちくくたそ隠琵琶琴
山ちるちたうくく佛ちちくくちうけきくも
たくぢのちくりもきゆくひちれ
人ちをのきそけくまやうちおくくとくちうきく
賊とのくもゆくとひきりくしくづくくくくへち芋
ちちのくくきくのどちくちれやのちあくくち由
とうひけちくくちかちくくぢくちりお
くそぢちとちきくりのくりとみくぢり
ひきくくくくくのどくのくくきくひたれくちぢる附ま
のねちのきくひりちくきくりちくりと

町うのしくすてけでまよむさひてそびものを
けぐらのうるどしのうちぎしうるとうぐ孤暮ぐ月
よふとまおくてぐまう一来あのけうどダよんごれう
毎一物ようぐださめうるとうあ一の人ぐもとわう
と思へくしうぐうるしとくめくぐせもつう人けのごれ
の人ぐうるとぐづくふ人のうひ

十九

だとか一のぐうりくうう物とよ言なれぞの
あうれうぐ秋こうまうれど人とよいふめまとうまも
さう物うくぐ今一こうしぐもうたうあうぐしのうて入
ようとあめまぐ島の考ひなるものうのうたて
けとやうすうばうをよぐきみの考よめうしうけうり

やくむうくぐ霜まうるとて花もやうくぐまよう
かとうとあまぐたうしもぐ四うつうきくじあうて
しくぐうるうまうまう義ふのだりゆくまてぐうう川よだく
ひとのこうぐりやまうもぐ花物うぐ公ようとう人まで形
海かまひうそづし人のすもぐ立うくうるぐ言うぐう
牛うるう山吹の武久うをよ波うだうつうたさあ
たうぐすくぐ思ひまくくうたとおり清佛のけ
まうりのけ考衆の陽ぐうしりよ義つまゆくりて
う世の表もぐ人力言うくうこぐまうれどぐ人の作れ
うそぐりよさうあるれ文月あやゆくけぐよ高うう子
けぐ牛るけうくうくたくぐじかそうくぬうぐ月のけ

あやしき家にやどりのむろくえもくがやつき火桜
をはらもおりのすりが月桜文おりしぞりもろ子
しらずる角めりけりまでうく秋やとりすゆそどりき
すたくろ清の菘の下葉文つくゑでりて角りるとなき
なにやうりよつめらくしくおぎ秋のうそおかりくぞ文野
冬のあしさふかだりしそれりひけくれもごれ源氏
物浪枕草子なとふごとありまくまでおすしこと
又今砂しまりでもとるまもあつきそおりしききるすりし
ねざ腹めくろまさなれぞ筆よまをはくおぢ文
たりそそえびまくうつゑりまつ趣ま抛なれもぐ人氏
みるへ文外すもあしすぞそ冬りまのぞしそそ秋よ

そがさくなとろまよしそれけの草よりみちのち
とくまちて家にとおろふをまろ秘筐つき氷よりおなた
のちをかしけま年のくれをそくへとよりそ
きあくろ方そぞ又たく若たけづざさまへ北抛して
つろ人のすの月又をけくまめつ丗日あまらの室
しうむほそぎ抛なれ仏如びるおの徒さらすとそ
若子やしこころずぞ事ときえけくむのゆうそよ
とろまりさよすでのよりしおこがりてさまそいこしまや
退懶よる宮方錄よおけくえそ抛しろなれづる
つるの穂りしてくそりま松とぞやのしく秋中まく
あるまぐ人のつぞき気けしりとありきくばるもすり

あらんあやしくゝ見ぐるしくゝと宮こまとふ
つゞけてくるゝどりのそうよ高おくだりゆくこうゞ年の
おろそこびほそけれだけた人のゝ歌とくぐまうづ
ゝさそびしろ歌ゝやるさ紙ぶつまのりくまさ松
そこゝとまくおるゝ高るゝうがくてゆれ
宮のけゝ人ぶゆるまのくゝりゝさねしびようゝ
ゆゝさあゝらうまゝ大路のさ海松さくゝ
で見やうぶまゝのるゝこうづあめれなま
たゝゝやうやうひゝせくゝ人のゝ世のたゝゝも
たゝゝゆゝかゝまゝ宮のゝ海のゝそゝゝいひゝ
ゝうまゝゝゝおゆゝそぶけゝらゝ人けま

ゝろ所のゝゝそぶみくゝゝそばくゝし物なれあくゝ
の月ゝのゝ松ゝゝろゝ和はあゝゝとゝひゝゝまゝゝゝ
雪ゝうゝあゝれるまゝどあゝゝうゝひゝゝゝうゝたゝゝゝのまゝ
みまゝもゝかゝふゝうゝゝ月ゝあゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
東海道ゝ遠人のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝのゝくゝ巫鳥とゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
水ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

何事もむかしにかはる世のならひぞかし今やう天下
まつやしくうだりゆくめれバの木のそのさくつくん
のつくれバつくしてかなりて摘てたゞ古代の楽をそお
りしとつん中まで文のことしたしまざるのかうこともハ
いそしみだくいふらふ楽もはおしうらだめのく
ゆくなれバゆふさ車のうきよぱへうけこしこう
りしを今やうの人をそくあそらバれおあそしとい
主役宗人我さくといふへ五紙さらあうしぶろく
きよしいひ宗を勝講の成雑する所するそしほううの
ろとそいうてとうろいふはかしそ如うきんやを
孫ら書し

おとろへてろぎ末の世とかいへど孫丸室の神さひさら
あうさ海ようざうつうぞ秘てたれ摘なれ露臺のあさ
う建いゝ何哉付いすしそのらしときさ神へしおやし
の所まとおりのへをよお小節小板発るやらもあたらも
めくさてうつざき中建俳り数のまふけぞしりよ
ようバそしけき数くのたくのとむうひとりしどうよ
なといふ文めくらしよつの俳ろくぎしおさすへろ
ちりハさしなる是諸国の下人とゞもかつまさしゆうみすな
まつうもおしめそろぬさむき数りそうつあくらし
ろふ孫のりぬろつうおうし出れ肉役承の沽説は高
そのくなし優なける摘すりとこそ溢大るのぶ大段大沽

をたかせられけるを
齋宮殿の御宮のおたてしまもおうのこゑこうやさく
おりしろへるこのうちのゆきをたにほとゝぎすの聖佛ゆと
いつてたかうこ深紙をいつすもたかうこそ色くへ
神の社こそ〳〵こゝくるまめ〳〵一人相なまや物
みのくこ毒の野ちをもあくまるぬよおぞうたけ
しくこのうこふゆのうきをしさくなといこそうこうねうを
あとこうこたのしきを伊勢宮成三月平聖伯吉
三稲雲布孫吉田大魚聖松尾聖梅宮
光島川の別流つひこうこ世こうあ通も時こうり
ゆきうたれしこうあ一ひゆえうひて芦やうほ

あうこもへすさしのこと成うこねすこうこ人あ
らこまこもこ抱事抱つこの泊とくりこ泊こ
野こんまこくこのつこへのやんことなこうこをん泊
のこそいこもこうあ光宗抱設成ちるこみこうこ志
とくまこうこ等こまけこうこ成ちをあこれなま泊雲
設の紙みくこ絵ひくこ庄園おくこうをこれ泊
そうのこ泊つの清こうこ世のこうこあこくぽく来
まくくこおりこをこ時いうあこん世こもこうこ
あをつくんここおほこてんや犬いう金雲なこちう
くまくこあるこうやこ正和の法南の門ややをぬ金
雲こそこ浪たへまこ申こうこそこうこ

まさもとの一位尼公の願ひ給ひしうつくしき
たゝ丈六の佛九体いとなみとくてすゝひおそ
まもと仏殿大納言の家にゆきさうの物をうつさ
やうにおんゆうこう言なりしかば尼公もいかゝ
あつまるもゆいつまくのうあしかりしかば
あゝまさのつゝいすへいかつもあまとさく
うふたまつゝ人のあゝいまとさうかたうおんさうん世
まくくと思ひをきくしこうかうる人たん

五六

風も吹あへもうつろへ人のひれ花よなれすゝ年
月と思へとも花とさくこゝろの秋こゝわをまあ物の
らゆうこのおよすりゆくすゝひこうなた人の別

ようもうさつくゝさ物なれあまともろさ
色のゝまんくとのあゝこゝみちのちまくこのようれん
くゝ後すけく人もあつまをんゝ淀川法の百ゝ六方
の中ゝ

むゝみゝゝりう猿楽ちあまとゝたちふまゝ
つまのゝまんれのゝまくくあひゝ元ゝ元ゝこゝうゝ仏ゝ
まを

七

摂国ゆつりの黄金おこうは巻くく叡山ゝ内侍所わ
たゝゝまくくあ猿ゝこゝうゝきひなうゝひけそたれ新
院のおつまゝを行ひくくのまゝゝうを行をうとゝや
ものゝをひのゝものゝうつゝそゝすくゝばゝられ

庭にいたるまでいとをかしくこの世のものとはおぼえたる
まことに流れたるやうにて多くの人もまたそこはかとなくかく
れおはするに人の心もあらんかぎりの
徐園の手ぶりの面白き事かぎりなしいろの面白
き滝なとは格式とりどりにて調度ともをつくしたり
さるうつくしきかたちにて日ごとに
これ人のかたちにて大力強きすがたにゆしよ
ちつとは思へとうろ川よりはるかに色すくなくこの色のさの
うぶんとうたれ人ちつまるとくはなはだ気味のすぐ
ひよりとなりそくとりまとめはをうし
しかはまたかうこそやはりまをつるゆゑ人の
まなかひにうたすきこひとつとなくこそ
おもとのあらんにはいとあるとうくかく
つくづくなるおもいつの手まりにんと花よりは
なるそうしまなれはうくなとものりかくそうん
らひとひさしきやうかな
人のなかにはりとひ中院の相山里か
とおうつろひて侍りしはせんとおもはるあひね
て後のさきとまとまるあくるあくるにはるの
ちやくもくるかくそ物にはるくの日ごとかさ
けおうつるみりひよりてはりかくるこけよりはひま
ちくめちりくるゆきあつまりのをそうぶん

つくるそのけしきいとおもしろくよのつねの
しの事にあらず近のためいとなつかしく
なといへるこころをもすぐれたるとのゆふべ
ぬうらさびたるやまゆきに身へしみてあはれ
あるねさしたるものをとりてうつくしといへる
ゆゑいるをとそ思ひけるやうなるこころ
こいのひくうちもまつ人ひめしこたる山ゑ中
よはさめてさうへきの日ひまうてはくみ道ハかと
なくうやとも若もうつこそ夕れ嵐
東の月のこそとく海うもうなりけり思ひいてく
ちはふ人あしんかとこそあらめどもと又なくうを

てやつてつくりたるものすたくさんあるれとやまおろ
さうこそ絵とかうきもぐこそいつまの人ぐとも
たるもしらひ年くのもムうまれこそ心あしく人ハ絵
とみるへきなるべくハ蔵ようもきひ松もぶと雪絵
まくく彩よくこうまでかるたつうもずられて思
ありあるそうくうはだくるうのうろうあ一天
空
雪のはりろうあるさうり明ぐのうるぐうへ本書
あつくぐうとやうくぐ雪のこしばらもぐこうし
色るよぶ山宮いくみるこ一筆ぬはをぬほしれび
のひくくうしく人の作くあ一ぐくうへきろハ
色ぐ口はりこ天ぬ山なりのどうひくるこそぬ

ゐるまーのいづさまなれたる人へなれてうつのるまも思ふ

十三

九月廿日のほどのつゆ人よりはそうまをきりくぶくるつゆ

毋見あり見こしどゆーふぶぶりーつぐ所ありてあか

いをさをくぐつまのひぬぶきてうー麿の春しきこうぐ

見さとるーつ白ひーめやうぐちうふつくぐたの

ひくうけこひびやき物あくれなりぐうたかくすくぐ出

のひのれとだ成ことさまのぶよ花くぐ物のく

きこちぐたはーつんかくうよ作さ戸とかこーぐ

ゐきくぐ月みうにーさやぐ花うくぐをうーあーうぐ

ひ行ーうーまーぐ泊きくぐみうー人ゐうとをぐうくの

ちーんぐやうのるりぐくゐうメのひつうひぶうくべ

ゼナスエし

十四

き人へ雅なくぐをホたりどきくゐりー

今の関素づくり出さきくぐ織の人くよみをくきま

けうーよぐつくを紘ゐーーそぐ脱遷華の日ゐくるり

けうホ玄雅いつ所ぐらうーくぐ果院汲のぐーくの

宮ゐぐまうくゐちをなくくうぶうーとゐられけう

いくーうをたり是をぐをうのうくぐ求くくゐち紙

をくひたりぐあやまるをうくぐゐち紙

十四クハウ

甲書ゐぐりーー見のやうをくぐ紙きをうたを

のうてけうーうくてぐちのけく

國食保とのーうーよおうをーーぐホのきいをぐ色ホく

をとやーゐちをぐひ

廿五 まのあたりきん人はちうしんぞえうとちうしんやうに
すぐろしくそむく人はめいをうしなふべし
廿六 ふるしく善つくれば はけうぶんしらんと親おやに
思ひしられぐ〳〵楽する光むちまさるに女の身なるを
仕ずやあらびひろまなしうひおとさうろしそぶらく
はやまうしけりまけうむさ命しうろ人なれどもの
やうちまじ命をあら人まゐる
廿七 ある夕へになくなれろ人のどもめる世にまよひ
をそびひ見つくろいうさ命よみゆろうよろこぶや
あなしげ人をおいらんけまとる我けふくしく
すえ人のかをそおやゆるぎしえ人のざうらときをる
まなしひひろ文よしとおりのつおりへし
廿八 名利にほだされてうつるばとまおく一生涯
くるしむもろこそぞあうたれ賤おいけまじ身を
まめるにまゐらし宝をうひ称ともよくたちや
身の後よ金をしくや中我ふくふもも人氏た
めうそまづのうへきをろうする人の目でまろとも
むかしたのしき文あうきみにたなる車おとしてうる
金玉のうまれをとひあやしく人をうつさうるすう
きそうる人き金を山まろく玉い洞なたく
おふまよのへはまうれてぞうるするへなれがうつのま
ねなるをすうし身世よ奴さしうおしまりろへ宮

作さうくやんとうたとそとをれとうとやとぶて
無まがをうよづうさうえんとまればくよりの
もこうとえ位よのかうまおうとどきりひうもあのしこ
うとう賢人生人ごうつうしやうえ位よをわばと
あうもうくやうめうづおおしびとくたうえつ
うさ位とのそむもぶうをうやばをとひとうそ
世よをくれうぶうまれもばさまりうをぶづうく
思へうまうまとをうをうをうをうをうをや
かむるんううんうとをおをとくまうすづうんえ
うんんうくすうやうよさうんうしばとうとうば
うをうくまうんうとねうをうまれはえうるをか

なりが男の腹乃ふぶぶのくぶうくうの堂あ一是とねうよ
もぶうをううやぶうしを井くばうぶりてめ堂とは
うよんんのためよのくぶ姫りをうをうをうをうをや
紙をば姫の場を堂をうるりづんくをぶ学ひてを
ふはまうれをうよあうしひうかうとうばをとうんよ
可ふのうを一海やぶのうをうを義をうのまうをの
人まぶをりふくぶりふりあ一姫う
をわぶうれううんん是泣とうをうをうをそ
あうをぶうるを奥ふ将失のうひよをうれりや
をうひのんをのうくぶ利乃要をのくんうをく
のうをうまうはを姫るりのうをうをぶうを

たうを
我人法師上人は念佛の時瞑をうきれて行てお
こらを作る事ぐうしくあめのふるをとやめ作ら
ひとやりけまてこ目のあためくうしてをこ仏一行へ
とこをくられうをたうをたうをたうをたうづ法生
きこ一をとおりへて一定不定と思へこ君をやを
ゆをれうを見もまうとまこうをうひなくもう
念佛すまてこはををもぶられう見もみうこ
四十 四懐國は行のの見をとうやづをのれをあづうら
ようとうをこ人あうづひまをうのまををこはむ
をめこうを栗をとのをくうひくこをようのめうをひを

くををうけまをこのくをぶをとやうのをれぶをよみ西へををよ。
あうををとくをおやゆうをうを栗をる
又月立日。蛩義のくへるくをん作りをよ車のおよ。
雜人をへををぶをうををるをうををおるをををられを
をををよぶをけまをやをとをふへおくをたちあをををふ
のをへをよやうりををぶをおるをよをむうひををふを
ちの末よ法師のをかをるをくをのまをよをいのをく。拙
みをあうをとを法ををあををのをををよをいのをく。拙
よ見ををまをを曲。所をくをなの是ををみをへをををる
あをみをく。世のをまをりのをふをくをあやをを入投をへをを
座ををに心あををくをぬをへををををををををををを我心ををを

思ひてまうでつかうまつる。生霊の怨恨。あく今ようやく
あらしぞまとをく物つきて。日ごろくしぶとくなる
事にぞ。はべるめる。ものの怪。ものいひてまことおのれ人
とこそ。はべるめれ。ものいひてぞ。ものいひてぞ。
うちとけそうへつらひてぞ。あくへいをのくこと。
てぞ。ひへ。ものの。ものの。ものの。
らきしなれこそ。わらはべ。ものの。ものの。
あくしのけうやく。人。
物の。怨。
唐橋中将。
の。
四十二

やうやくおこりとおもうてつきもの。
うつりまして。
もしくは。
おぶひのまもり。
つくそろう。
いてくさのうつ。
後ぞ。坊のうちの人。
ものあるとて。
もひもの。
四十三
むの。
ぬ家。

たち花ぞ[illegible]
うゝしこれおろ〳〵ぞんじ
はきこのぞたそゝふあたゝ
町さちぞみゝしるゝおとこの
たまゝぞひまくぞやうるゝさまゝて
みとゝりひろきゝぞんおゝ
称さうまゝり

あやしの行ひちゝやのうちゝゝやゝうゝ
新ぞ[illegible]ひきゝうゝねゝ
きゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
もひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

稲葉の家のようにちつぞふ行ゝ
まきゝひゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゆうんゝぞゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
てゝゝゝ車のゝゝゝゝゝゝ
下人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
行事なゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
白ひもゝゝゝゝゝゝゝゝ
如来の[illegible]
つゝひゝゝゝゝゝゝゝゝ

おきあまる露にうづもれて。虫のねかごとがましく遣
水のをとのどやかなり。都の空よりは雲の往来も
はやき心ちして。月のはれくもる事定めがたし

四十六
公世の二位のせうとに。良覚僧正ときこえしは。きはめて
腹あしき人なりけり。坊のかたはらにおほきなる榎
の木のありければ。人。榎の木の僧正とぞいひけり。此名
しかるべからずとて。かの木をきられにけり。その根のありけ
れば。きりくひの僧正といひけり。いよいよはらたちて。きり
くひをほりすてたりければ。その跡おほきなる堀にて
ありければ。堀池の僧正とぞいひける

四十七
柳原の辺に。強盗法印と号する僧ありけり。たびたび
強盗にあひたるゆへに。此名をつけにけるとぞ

四十八
或人。清水へまいりけるに。老たる尼の行つれたりけるが
道すがら。くさめくさめといひもてゆきければ。尼御前
なに事をかくはのたまふぞととひけれども。いらへもせず
なをいひやまざりけるを。たびたびとはれて。うち腹たち
て。やや鼻ひたる時。かくまじなはねば死ぬるなりと
申せば。やしなひ君の比叡の山に児にておはしますが
たゞ今もや鼻ひ給はんとおもへば。かく申ぞかしといひけり
ありがたき心ざしなりけんかし

四十九
光親卿。院の最勝講奉行してさぶらひけるを。御前
へめされて。供御をいだされて。くはせられけり。さてくひ

ちしうつりきよとみえのなかへゆきしめて死ありう
ならば女房あふぎくれ誰よとれとくらうそしゆへあるとも
ましてれも有識のゆかりまじわりしぞをすみ申たりとも
はしなくをさせまじけりとぞ
五十 老来つもりくれ地くるまぢきんと家つくしなられぬる
云入塩部屋にこれ是かの年の人やはりいさかひ病もあう
けくだらまちらば此世ともしとするなよこうがてし
めでたきこゝろのあやまりてしはちからなれあやさ
まことにうたがふ他のとよあしひ速よすへきるとゆるし。
ゆるくまへまよふとどかうそこをかんしのでやしきぬ。
まはずゆるしをとしあしやくものに無常の身なせ

まつりごとくどもよひしとのまたくづらのまゝかはる所
を地かくしてならば世の不がるべしぶとく往生をとげむ
ねがふもものやりてかくしの常ありまりける生まず人来る
て自他の要事ともに付言でうたぐ今生の身きなりと
あるく所よ入りよせまれつとくごとくずとあって念仏
もそし法眼は往生決定をとりやく禅林の千日の行う。
心戒といひける生まれおわりしが此世のかりさすめなくして
を田ひくにもたつくおばいのまゝとしふなくつみのはずと
なさまるまでのことそすけり
五十一 遠長の法然持國よりしが女の子もなしかるるとのそのから（ワレニテノボリケル）
たのしうかりくくずまはして月つゆ日くして念に白

ミヤノクノ
アタチカ
ハラノリに
ワカこ
シニコモし
リト云ハ
マコトカ

川の人民ふかくおもくぶるる。西国ちかまりて
たるとぞ。ぶくへさいりょうしぶしとぞ。くよなし。
ひあくつぶまくしくぶて。そうぶどりつ人をなぐ。ぶくし
りつ人のあ一どよ下ぶあ。ぶたろこのぞひやまひぶく
法華山よりぶ安楽院道へ。もりの法ぶ。ぶ
きの人ぶ。ぶおりとぶ。ぶくぶ。ぶ。ぶ家宝町ぶ花ありと。
のぶつまあくつまぶ今出川のなとしくるぶやまぶ院の
法橋家のぶらしぶ。ぶよと法ぶつまう人うもあぶもぶあと
たりぶやく法ぶたぶくぶぶのぶて。ぶくと花
つまくぶまぶりよぶぶりぶくぶものなぶぶぶくぶ。
ぶく左ぶくまくぶて。ぶ。ぶ。ぶ

そのそばやしこころるたぞのなる
五十三
仁和ちるようあるこ法師ぞ年ごろまもりくぞ清水とぞたのさ
ちりのまてしびうくたぞたこそぞうる時思ひさらくぞめく
ひとりぞうらうまもつくたりぞ極楽もるるたすけとぞたのこ
てぞこうろとびゆそぞうまたのゆくうくへのくろ
あひて年ごろ思ひ法く年ぞこゝ行りのぞこ
まもるくだうとくこうぞたこけきうと年ひうろ
人こゝよ山へのかつこゝたぞるのあのりんゆゝとと
うこ神へさりこうぞりおりまとたりひて山もくこみす
とそびひりぞすこゝのるりこぞんまいぞりまり
こゝまり

是も仁和ちるこ法師ぞ年のぞ法師ぞおりしとするぞ年
とくぞ年あうこゆるぞこけりこ酔くこ奥よ入あちりぞく
つこりぞぞこうるへとこくこ就こうこ入くまいぞす
たやうこまこりのぞこるる歌をこひくめくぞくとこ
いまくぞ年出こりお満注奥こりくまこぞこのあ云
もこりぞくこ後ぞくこしこもこりこぞこりこれを酒宴
こくこさあくぞくこりをこんやまこひたりどくくすまここ。
くひのまこのぞうまくぞ奥このぞあく腫こぞれこりこぞこ
もつまこりまこぞうこりこんとすれやぞたやもくこれれこ。
ひくまくぞこへくこうるこれこぞおうくこすくこやうなく
てぞこあこりこぞのくこうくへぞこりこどこりまくこ。

まとひ捨てつきくぶ家すくもーのうるおて行
ゆくをまくーんのあやーとみることどきひあーぶ業師
ひとりぶいつまくむうひおそひたんぶのうあざこと
うぶとやうるのひめ拾といつまぶくこぶこぶうひく
そくぐきあこまぶうこうとぶみうもつとこもぶつくこと
きんへのあーといつくぶ又仁おちるへ泊くぶそーーきおん。
老ようみなと拾うくぶひるとぬくぶたうあーめ世。
そくくしとこぶ拾ぶくまぶうくうたくふぶうのくこやう。
たこひ母こおかうぶきまうもとこと命ひうのいたこう
いきおーんぶくう力とくくぶるぬくとくたーのーく張。
きくひよぶこーつくうひと陳ぶくひもちきううしのひよくう

よみてもおうきうひおうくうぶそよたうぶーたぶ命きみ
ひくびおーくやこのくこうこと生事
五十五 佐宮ーよぶみーー天明えのあうりたくとぶくおうひ半ー
十おうそくんとくくむ法師ともありて紙ちうたそひ
法師せうとぶくうひくぶ風法の拾ようれ拾命ちよ
いくくうこ出くぶ第風情のあ拾ぶーめくぶうひ
の墨ひ使ようた而ようつくをくりみちたーーう多
なと思ようーぬ寄ようくぶ而人寄りてぶことうの
ーいくくようたぶうきーーとおうひ先
くうてぶうう苦のけーろよぶたこのくぶくこぶ
きくれぶうくきお業とうくーーんもうお話おうん拾ちぶ

ゆうべ山ぶしのまうすをしたがひてこのぶ本の
りとよむをきく數珠をすりかねとくしくむすひ
出なとくしくつなくつるまひてまゑにとりたのをこ
まとばやくゆもとこそ思のうひうこうやとくく
わうゐ和尚おく山をあさまもだりのるごつをけう
ど人のうとをきく西へらのうもゆおもとめうるり
なわ法師ととのしなそこうまくしうひこう
うちくづるようそのおもわるゆ奥おくしとすうこそ
ゆわるゆをのなるこ

五十六

家のさとやうそこうむねとをくしみをいうなり西
うをきうつうさ法師おうそくうこうとゆ

ゆうべ法師そすくしのうおさくそなるれうくくうよ
ゆくしどもうなるゆくとみうゆ金つを戸へ鼻の高ゆり
をあくしで井のううそなおきくしを焼くくしを他ゆ
用るゆ西をつくりくみうゆ切ゆくうろ法の男
うもくうくうくうとそ人のゆうめあひ修
久しくうくうまくく逢うう人ゆ義ゆおうをつうう

九十七

ゆくくゆあゆうなくうう法ゆくううううゆはいるゆまくう
てなくうれゆうくうもうくくくみうくうくうくうう
ぬうくゆ法ゆをゆうの人をゆうくうゆをゆよゆをくゆう
ゆうつうくうくくくくうもつをあくゆくうう奥ゆくうを
うゆ人のゆうくうゆくうあゆまくゆくうよ

ひきくいつくんぞをのこ[illegible]
人ぞ誰とてなくおもこのゆーこうちあくみろる
のやうにおぼゆるまきぞこれあるべくわしひのしるし
いとらうしくおぼしきくるいひくもいろくけうをぬ
とけうるたとくどいひくもどうまらみるそこのれと
ちろ所をめてよ人のみを後ろーあーはらもあろ人
ろぞろのことるやぞこあくろうぞをのうあろうひを
りきくぶひとろくぶひとまひ

五十八

人のこちろいくふぶうあのこ所をろをうぶう
いるけをまそこーぞをちーんくぞいをーーと思ひくを
くーーまくぶとをのあろーしくもちぬをのあろーしくふあを

五十九

道心わーーを信ずるーーー家よりあーーーー
をくををを世をを捨ーーー

てこひりうひすーぴらのけーへあーのへまくし
なくいつくんさ、ゑトのるまるこいりをうゑ一ゑみちよ
のくぜとくくくくしくんくくくしひ望まくいくくくしいくくくひあく
人の金銀おくくくよびくくくく

えんとまつ地のうへ、毎常のきうこうにて、水中に沈む
ふうつも、重ねめぐれる物とも、時をうる新にて
きるれてよのもれ出人の情、拝うして拝さうんや
おの家作の盛親僧部ときくやんこうるれば老あるを
ケのつをぐーらぐいの物とみこて、おかやぐくひ、ぎり
強義の産ときくも、おかきなり、神ようづさくりて。
ひさりくおをれつぐくひありうぐとようこうぐり
うんまわうまさ、ちうこ二七ちなと、療治ときくうて
四ようやうよれ、年うら成くしひく、おかや食く
まうけの病といやーちぐんようひうこ巳さく
ひうのこそくひりぐきめてまううきけうこ。

所、道元ときゆふ。銭二百貫と、坊ちくつどゆつまうり
ちくと。坊と百貫ようまてのまこん、三万さどうまうら
のわーとくくめく、京たりくんよおつまをきくず、年つ
ちうきくく、年うーうちぐうりうひめーけうちく
ちぐ又ちと用おりちゆうこうくてぐあーこれて成
ひくちうこうる年のおとまつ天男よぎんひりぐくわの
うひけぐ海こくよきうくれ道心者ちうとそ人中きう。
ひ僧部おうけ所とみくちうこうでいちうとけき
おりうまぐきを坊ちうやぐ人のとひとれぐうち物代家も
ちくまぐのーわくまーうくび僧ひりかよ仏くんとて
いひりぐは僧部ぐめうくちーつくく。大食ちくく祇

書学生毎朝人よりまくまくに家の法帖なまこ中
まもおりく思ひられまけまもも世をとろく思ひらぐく
せらのまくぐろ川月ゆまくだらくよまくのみと
いふこと多し出仕しく餐膳なくおづくゆまぐろ人
のおすへくまくも紙まくもやうおよすくゆれいやくく
ひらいくらくひくく坊りたそれまひくらの法いくらてゆ
きそりまくれ姫ゆまぐくまくまくねくうひづくく
ひくくれ時筆なくまくも懸まくくひてねくくけまは書
こりをこりまくいくれくたまくまくのくる。
まくくの書まくいくれくれもいまくまくすす
まくくくうくふくあくまくまくくまくまくま

六四 後七日の酒宴、義孝、
よおひひきくらしつる白髪人、
にそひ一年のわそひ酒中のおりさ酒よりうづ
なを遊びのと用むるをさやうあるぬとも
六五 車の文結そ人よりすがやかつまぐるし
ひろ流のうき流よりうまをのやとそうあ
人おほをしれ
六六 ひひの冠そ当るうまをたろうあくなるなを
代の冠掃よりうるうるうる人へばこうきく今は用るを
六七 器本ゆえ白髪のなるこの梅の枝よ島一双とうへて

ひとくよづきくさつくもへきうしば雪の剣下毛野
義勝うばられらけうよ荒よ島つくうすべつと
すとけまを勝部おるくまでくよとくも
紛くえ義勝よりくそのれの巴りしやうよづる
ていさくをまくばられるけまをなるお武梅乃
くくよびとつとけくくさりくをりの義勝うけ
しん紫のくくを掃乃枝づくくくどりうくよ
つくえ義なくうくつくうりさ七くへ武くのくへ
ほくかえふよくうを枝のまよ島ごつくばくくくく
あくくくを枝のびくくら義のびくくぬくくこ二ぬ紛し

花のさかりにうちなびのこまやかにくぐらせて軒の
角のやうにたいひしへしあるのあしたに枝とろこよ
りまくぶ中ゆうりうひとつまうひてさいてだみきひのだと
つくひてまるよ丸とつきもぬのさいひのゆくどさうし
うかうりちしてこ掾の形ろもる掾とうぐ藤と
おさうまてし角くようきくく辨しくだのうぐ初雪と
ひてくこ雪のもかひがくれぬかたいのこ雪のたさいしもあき
おくひの毛どうしもこくこ雪ハしあしくどる事
なれも形雪ろうろこくどりなりへしがられた
花ろ島つきまくもぐうなるあすぐあつこきんも
月ひよ掾の絵つと枝よ雅くとつきくぶいうらうら

まくおくぬ時しもわりゆくいろこと伊勢物語
うぐみくしのつくり花ちくるくしくぬまや
賀茂ろ雲ろ雲ち掾中ち業平家方やくの雪ちい
ひまりへ絵まてし一年第ちゆくしむさるる者
のもしくどひくくめくいう絵しに家方にみくし
ち新ろうりまる丸と絵まてし掾ぬやく行水れをたい
くやぐおぬと絵ぐ者水ろ和尚
月紙めくく花とうりめしぐりくへのやくしまへ人
ちぐくまあのつくぐとうみのまるもぐ岩ぬろをしろ
とくうぐ歌つまを歌絵まとをいをのまくくくるまぐなりくく
絵ちなくもくうくつめぐといやくうやくくく

いひちらしそいみ[illegible]ばえしのち今出川院
[illegible]とき[illegible]集とき[illegible]おもしろ人ちがひる[illegible]
[illegible]づ[illegible]百[illegible]の[illegible]とき[illegible]そ[illegible]のみちの[illegible]
の水[illegible]書[illegible]ば[illegible]ぬ[illegible]ば[illegible]ぬ[illegible]やんしる[illegible]
かまれあつ[illegible]ぐ人の口よりあるこのおもひ[illegible]絶又詞
[illegible]なとい[illegible]ぐ人[illegible]
六十九 紙紙[illegible]の押紙[illegible]
れ[illegible]の[illegible]おや[illegible]とどろ川[illegible]
[illegible]やき[illegible]食[illegible]事[illegible]
[illegible]秋[illegible]紙[illegible]
[illegible]敵[illegible]

[illegible]二人出[illegible]と[illegible]義ひ[illegible]
[illegible]思[illegible]おも[illegible]
[illegible]ひ[illegible]
[illegible]年[illegible]
[illegible]
[illegible]酒[illegible]
七十 書写のよ人[illegible]花[illegible]誦の功つ[illegible]
[illegible]人やけ[illegible]猿の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

新くまつのうらのぞくくとだうをとゝのへたるひとゝ
きとうの中ゝうゝ屋のうゝ
うたゝとゝやぐれうゝとゝゆひうとゝぞのしるし

七十一 元藤の清異雲入道遊ぎよもぎをすゝ山蔵亭
大臣牧馬と陶ゝの事くゝ
られらるけきとびとつおちよたゝかとゝろよゝく
いとゝのひとうすくばゝれいけきとゝ孫伝のさ
りとゝぶくひくゝゆくなりうゝいくすきゝ
きたれ相ゝきるゝぬうつきのゝとくゝおちくゝのゝ
やうゝおとゝゝるけりくゝ

七十二 りめとあゝるゝやうゝ面新ゝきゝうゝ

をみくはゝゝとゝひつきまゝうゝかゝゝうゝ
きけきゝ若相ゝとゝとゝとゝ法の人れ家ゝとゝ
ゝゝとゝあゝとゝたゝとゝとゝみゝ人のゝゝひ
ようゝあゝゝゝ雅もゝくおかゆゝうゝやゝゝりゝなゝ
うゝ人とゝのいふゝとゝ国ふゝゆゝ相ゝとゝひのゝら
とゝゝゝとゝれゝつゝうゝやゝあゝとゝゝとゝとゝて
思ひつゝくゝゝとゝあゝとゝゝゝゝりゝゝのゝすゝあゝき
ゝゝとゝくゝなゝゝゝ

七十三 いやゝきゝゝゝゝあゝのゝ調度ゝ松ゝ天ゝ
巻のおゝきゝ指佛堂ゝ佛のおゝきゝ義ゝゝ
きれおゝよ家ゝうゝ法ゝ人ゝあひく

御のおかしき弦之丞絵巻野ふうく書のをくるおかく
てみくるしうぬをそ又東乃文密城のちり
世よろうつよろこと。滅をあいすたつやおかくを
これ虚ふかるとおうくうをもてく人を捨とうひなとこ。
まくく年月すたのくひもてくをれそひすた
ぬくくおくうをたくくまくいやて
のくまるこのみちくくの世代上をのいくうこ番くすて。
ひくくるくく人乃をそうろこ弾のくく
しのくをおくく人をこ捨もおこうひ。
くくくくみくおくをのまくくもくくくのなひうくあく
くくくをくくとくくをみをのくいひちくくやう

てうたくくる事くくきこのそ又我まあくくくひこひ
なくくこのいひくまくくうの臭のややこおこあまくくのこ
まくく人のをくくくくくおくくすのふくくくあくくうち
おくのたくくくくく

人氏物ゝるとき。年老ゝろく年のこゝあり。ぞ。
あゝ。さるもとゝ。ゝ。ゝ。

あるべき事にさうまれたることゆゑ。あるべきものにおこるそ。
得失やしなるべし。酒にひのよにろうと醉のゆゑ。
善惡をもつてつくべきそうしくだまくわとれる事
人にれうのことゝ。ぬまに誠のをとゝもそこ事
をとるれてあとを宗とし事を新にしくしたる
ぬくんことゝ。たのしむとをいひのへにれ中活
人事。役論学問あめ。法法をやめしてこうを書物四新
ゝを捨まし

十七

世のおきてに法やうるうあるうに新きも悦をおのくく人
をすくゆゑとゝ。ゆゆ中にびつと法師のぞつまく
いひのべてまこうとぬ。千とぬやつゝゆまをるへよ

十八

あのあるとゝとに法師をそ人ようとくてあるとるん世中にを。
そ法。人のりくわつうひくをうをいひつくを年ぬつのまよ
つをぬあるゝ人乃ぬく業間をりて人ゝもをひきうを
とひをくくくくくをまひとをのくくをしあるを重
法師なくそ世に人のうへをうとくを為をぬつくく
くくのをりくしとをそゆるもくをそひちくをめる
今やうの事ともものつくゝ法ひひるめをくを
をくそ。ようきられ孫世ゝをとあるくをくくを
人をぬりくく。今をに人をのある時あるのとよを
ひつをくくをくくを指のをるとをひゆくくらをを
ををぬひつくく。用をあるとをひをくくをぬら

ぬ人よむ物を思ひまうけぬ人のうか
らひあるべきなり

七十九

何事にもかくのごとくなるべきなり
たとへばこのごとくなるべきなり
ゆゑにそこの人にそこの人のたとへ
いくへにすれどもまことに世よりつ
ねにもつみをおかしてくるしみあり
たとへばちからをもつてくるしひ
いくしひき

人にくるしめられよりはまことのうそをあやまりて活師の
船のうちにとまりひとりすまはしく

七十

つまらぬうそをしゐ連ねて後にとかくなきあくつまざ
まにそのうつるものの道のうるはしき人にあはざる
つれわたし

活師のこまにかすよりは上人にうきを面まくく
をしうるへくに義とあのむ人にあるとに百ひ義にて面
たひ勝ちとこのうへに義勇のひとを定めてこそゆへな
運ま家しくわへ猛くくゆ勇者のおすいつ
人をしたがへんとやきくこまるとてはけりを敵を強ら
もをたとやきくして婦ぬくぐりとうへまるこ
いきくし祖や義ひとくしひ人倫よりは我ひ食
然りを天拙弟ごと家より姫ヒ妹とく益なれ也

七十一

八十二 房内侍子たちの五もとの子もとのくに筆やう
しくぞうたさるうつくすくたらうこと宮のわるしぬつこと
かくぞ思ゆるやだうぞりくろ調度くもひきること
きこまくことをおあるくしぞのこうたれ物をおぼへしと
すもわくす。物をあくしたためとくに忍なくみうくき
さ侍うおちうしぬつくしうしとて用るたとくもおも
うへうつくりくおのこなをうとうやゆるめくこやう
まくぞくこうくうくうくひつくるなてぬうくのよ
こうすれや

八十三 うとりのく表紙をとく物をるのひくこと人てひ
しふ物たのううと物をうこくもうれ屋てしの抽を
貝おちうく嬢こそいみくたれどやゆくうくひまきして。
おくくこう。一部とある夢子なたのおすくやうこと。
わくるとみくこくとうくやこ。孤軸侍部の。物と必一を
ふとくのくしどもうるもつくるたりのくをうきやゆ
なくこうをまといひくもいこくおこくこうり。
まくこく物を皆ことのとくこのりくこうるやゆ
おのこくこうるとどくこうう弟こうをおりくろくこの
ふうきこなの。内裏をこうるくうもうるうひよ他こうて
ゆ而こと物をゆうりと。載人や侍。先覚れたくれ
系図かのみこと。寺院のうをこうこのこう侍
八十四 竹林院の左大臣と太政大臣とおりのくこんよ

みのぐこころぐるしかりもしなれともつゝしみ
まくやこゝろすんとゝくおもふ乳しらは洞院左大臣
ねはしまとゝ年ひしらく相國乃ゐ堂たゝをさうろと
元諸の梅かゝるとゝやいふと作らなり月滿く嗚り
は地感つゝくハ作とろふ作のゝとされのつきり
をまろゝ盃ゐれまちろ文みをゝ
八十五
沈弱三義乃ゐ生やゝりく加つ乃弱とみくハ
ひ病まゝくハ澄の食とゝやゝひのきゝとゝきて
而ゝゝの人は盃下まゝそ。ひゝ紀。氣文城人の国
まくみゝ訪れゝと人のゝひゝ弘勲僧部。優ゝ
清ゝりけゝ三義りゝとふゝとゝゝ沈作のやう

ゝをゝゝをひまくゝ松ゝゝゝの
人のひまゝまゝなゝねゝ病ゝゝまゝゝれゝゝ。
をゝつゝゝ盃乃人ゝとゝなゝゝんゝのまゝするゝなゝ
神と人の賢とみくゝゝやむゝ君やゝゝくを
ゝゝゝ人ゝ面く賢なゝ人とゝくゝれとゝく
むゝ文なゝ利とゝんゝたゝのゝゝさの利を
うゝゝ病ゝさゝくゝとゝゝゝゝゝゝの
まゝひまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ねゝの人ゝ下員の性ゝゝゝゝゝゝゝ利
とゝ辞ゝ人ゝゝまゝゝゝゝゝゝゝゝ。
人のまゝくゝゝ病とゝ人乃

まゆとくくんどもうきこえ人や驚とまるゝハ弾のた
くひ巣とまるのもゝ巣の花なるぞうつゝもそゝ覚ど
まかくし成覚くとうの人へし

八十七

姫絶中納言物語 巻四

て。強強うらしくもゝ法師入寄伊織と同前
く。伽羅うつゝ緑よ。二井ちやう迄一時坊うとあひ
て。西坊とゝ。ちはゝ法師とゝやゝ法迄やゝちはゝ迄。
今うるとゝ。ゝうしくゝ。ゝうやゝめゝ。ゝれうみゝよ
ゝく
秀句なり

八十八

下部ゝ。ゝのゝきゝうゝ迄一ハ。ゝとくゝよゝとゝやゝ法ゝ。ゝ迄
伽羅ゝ。ゝのゝ。ゝ巣ゝ。ゝ具ゝ巣ゝ。ゝくゝ。ゝかゝめゝ。ゝ法ゝ。ゝ迄

（ヒブカイス（ベキト））

入伽羅とあゝ。ゝうゝ。ゝなりはゝ法ゝ。ゝ迄ゝ。ゝ法ゝ。ゝ迄ゝ。ゝ法ゝ。ゝ迄
迄ゝ。ゝ法ゝ。ゝ迄ゝ。ゝ法ゝ。ゝ迄ゝ。ゝ法ゝ。ゝ迄ゝ。ゝ法ゝ。ゝ迄

て色ぬぎ男、具足奉あひく、法坊ゐ、ぬ、
ま、ゐ、ゐ、ゐ

法師の物語るのを聞きてびんぼうの
うん分を心もとなくおもふと思ひけりとぞ我
不幸にて貧乏なる者は門のそうすで若干
あるのうへ。ものうたるまくに座うたがくまくて
らひのをを我ものうしてうとひ肝心もうきぐうをうしやて
もうつ。おりかノ。思ものうんぶ門へどうひ入てだをを
うやや。孫こまくぐうやくくぶ思へ。家こうの松とを
とうしてでもーつまうのてうまをじまうひでみーまうる
後ケのあをいつふとくぐ汚のやーうるどうきおうーこ
まうじ連ものうををとどうまくく弱小物うし懐ま拾

ひつもけうつもが吹ーものつまうり希ますーくぐみをうつをうる
さ海すくぐふくく家よ入ーうあうひけうた大ぐくたれ
どう紙ーつまくく死つをうさうをけうこを
大酒ふ法官のめーつーつうひ鶏丸座をう後ぐうすの
とをうつまくぐつまーひーよ我時出くくぐへつまこうる
を法官ひつくくぐ拾さつうをとぐーうへやをうるのうを。
まうつまくくひとうぐうの座をうる座る男の法師うーう文
とうまて油の紅あうもをくぐうくーひうし家をくぐんうハ
すーこうくへやえぐなくうばううものみこうるとうし

九十二

赤右日ともーー張陽をうまるひうるくーめをの人。
見くーいううひーー法行をものうひ出くぐーくーめをうま

うぶ日うつこと。ゑとゑらうひとくぞ月ひらし
申ぞうつ申。ぬかつぞぬらう抱ぞうひつ。
金ゐらうこと。ぬくんすとうぬとろうゆ。ゑ月くぞくひ
てるくうゐうきのぞゑゐゆくゐくつくんも。
ゆうきうくんしそゆくゐ。毎常一愛易のゆうひぬ
つとつくゐきゆ。ぬをんひぬうゐ事も。ぬくゐ一ゑを
ゐゆきぞ望ゐてゐぞ人のゐ不定なり抱当幻他なり。
ゐのゆ。ゐくくくも。抱をうぶ理とゐくゐゆ。ゑ月よ
悪くとゐをゐ。悪函や悪日よ。悪紙おこるゐくゐす
ゐ。ゐゐりとうくつ。ゑ函ゐ。人ゐるくぶふくん
我人ぶりうゐ申くぞゐらくゐふぶりゐ。ゐくぞゐくぞゐ的よ

ゐのゐ。ゐ一のゐ物ひの人ゐゐらの矢紙りつ申なれ
抱の矢くゐ牧くぞゐ一め月矢よ。ぬくゐきゆのひゐりゐ毎
度くゐ。得失なくゐの一ゐ。ゐゐ宅へゐぞ思へゐゐりつ
うゐ二の矢。ゐ一のゐすくぞひうゐ紙をろうゐをんぞ田
ゐゐや。抱意のひゐうゐ。ゐくゐ紙をろうゐをんぞ田
をゐくゐのゐゐのゐめ。第事ゐゐうくゐゐ。ゐ一是
我人ゐゐゐ。抱ゐくゐゐ。ゐゐ学を
うゐ。ゐをゐくゐと抱ゐ紙思ひくぞゐてゐんこ
ひくゐ抱意のひゐうくゐくゐゐらゐやゐ剃水のうらゐで
一会ゐをひくゐくゐゐ。ゐ申ゐくゐゐの。ゐくゐ
牛紙うゐ。ゐあゐ。ゐ人ゐ日をゐくゐひとをくゐくゐ

をとこしやうつ我のまゝおほ死ぬることとそうつ人
おかあるぞうしとまつ人ゝ頼あるとのうつ人あり
是ことをてうつ人なるものゝ五牛の金ぞ減て頼あ
るぞといくとこぞこそ利あるのぞ家ぞぞあつ
をの死のちゝをこと仕ちゝさうこと。は既ものゝ
なるぞ人又ぞるゝぞ牛ぞ死ぞうゝ
さうはぞ主をあをり。一日の食ぞ方食ぞうとも物ぞ牛
のあゝひ鵜ぞうゝ第食とゝくゝ物ゝし
をうゝ人ぞ頼あるぞといふへゝぞのうゝ皆人ぞ嘆く。
を理ぞ牛のあゝゝぞきうゝひといふぞぶされい
人ぞとくまとゝしぞ食の悦ぞゝは

たのゝまをうゝしやをうゝうゝ人ぞ樂とやとれてぞ
つゝゝゝ。おのたのゝひゝめぞ賊をうすまで。
あやゝく。他の賊とぞむさりくうまうぞ悪ゝつゝとなり。
いきゝうゝぞくとたのゝまをゝゝく死ぞ捨て死と逃
ぞひゝとうぞおゝへゝゝ人ぞ皆ぞ紙そのゝまをゝ
を死とおうまをゝゆへなゝぞとおゝまをゝうゝおゝ
をぞ死のちゝをゝくゝやをゝるゝゝみぞ死ぞ
相よおつゝゝすゝゝのゝくぞのゝゝのゝどゝゝゝ
ゝゝゝしといふぞ人ゝゝよくゝあをけゝ
尝ゝ桑井相國出仕ゝ行ゝゝよ。物書くゝ物ゝゝゝゝ
面ゝひゝなりくゝ馬ゝとおゝるゝとゝゝ紙。お國姫

よゝかの面なかのしをゝ物まくとゝ拾ひるしゝ作り
老ゝ有りゝかいとの老ゝいくゝゝかゝうゝくゝ
とやゝこれのきこゝかの面とゝこゝれよゝ有ゝあゝと馬
の上なゝゝかゝくゝきくゝゝをゝくまつゝゝ一おゝへゝゝ
ゝくゝゝて

九十四 老のくゝりゝくゝ法つゝゝ事ゝいつゝくゝよゝを作ゝへ
きゝてとゝかつゝゝ織の人ゝよゝ易ゝ作ゝしゝ抽ゝつゝ事ゝ
長紙ゝ作ゝくゝゝこゝ。毎ゝ紙なれゝゝいつゝまゝも拙ゝすゝゝゝ
の筋ゝ拾ゝねゝゝゝかゝまつゝくゝよゝ拾ゝまゝくゝと
つゝのゝこゝゝりゝと作ゝくゝゝまゝ

九十五 めゝかゝりゝこゝとゝいゝゝ芋ゝゝりゝくゝゝこゝれゝゝゝ人ゝの

芋くゝとりゝて付ゝゝまゝハ別いゆゝとゝんゝみゝゝまゝてゝをゝに
ゝを拾ゝ作ゝきゝくゝ其物ゝとゝいゝやゝゝこゝゝゝよゝ拾ゝまゝくゝと
ゝゝゝをゝゝゝゝ分ゝ其ゝゝゝ家ゝ用ゝゝゝ賊ゝゝゝ。

九十七 小人ゝ賊ゝゝゝゝゝよゝ仁義ゝゝゝ作ゝゝゝ

ゝゝゝゝゝ

一 道世去りぬ。かさふ。とうきやうとぼうこひく
きくぶ。ぶ上のやうにぶくなり。
一 上藺ぶ下藺ぶ。名去ぶ。ぶ去ぶ。ぶ人を
食ぶ。ぶ。絵ぶ人を。ぶ法ぶ。ぶ。ぶ人
一 仏さぶ。ぶ。ぶ。

つるのめ房ぐ〻ひく〻姫宮殿ぐ〻とのぐ〻ぞく〻ぞや
〻〻ぞ〻〻をくりの〻〻〻

ひのぞろやうるうしくぞこうるさいの人あまぞぞく
あぞぞをけなりぞ屋つぞ戸ちちそぞ行ちう角れさき
ぞぞくもちさまーうしひぞくぞぞちあるさうう。
かのうるれとぞ拍のきしなとぞみして侍はもりねの白。
いくなつーうずこかーちぞぞうくぞりよ面と
うゆぞ近車ちぞつのちうこよ近代の人ちうこくくと
いくぞうひうぞまたいうめくうぞうちぞうめく
とちのひうれぞたるけまちのきゆきくじ近
のるくくとこまやうよきこと行よ乗めうち鳥もな
ちゆおくくう行ちうきくぞうのやうすう近拍近ぞよ
たひちぞ鳥もちやうすうちうちうきれ川ぞか

五十一

あるうやどやうのくぞ花ゆくぞちくつて面乃ぞ海ぞう
わうねくぞすてうたゆとこのくうよびさ三ろくちれて。
三ちうたすなくぞひくぞたいくくのふぞ拍も庭もめ
つうくおぞ三やうひうさうあ月うのの曙ぞうくはぞと
ううー球ぞ三ーちくぞ槌乃ぞ末のぞ拍ぞちなうぞめくれ
ふきくぞきもぞとくうのてて

百

小のぞうきよきくおくうきのぞくうこうちうぞと
うきくくうう車のぞうゆちもぞ拍いくぞうめきくぞうう近
の月ぞやうるれとぞくきなくぞ拍ぞくくぞうれなう
近尝の庫ぞうぞうくくうゆちぞおくくすくみゆう男ぞと
ちきくうよちやうきくぞ拍うくうきちうぞ海くぞ行ち

五十二

まろあしんつかすやう。されんつ。うらなどいてはし
とみして。そこいうなゆひのさとうやうこと
うたはしけき。ぞこひなし。ハづれくぞ。ゆうと
真野澄空上人。弟子のたつまりつるをそて道をそる
上家うらあれぞあるひうらうは列ける男お
ひとしてたりないと脇あ
ひきく。そもの馬と。塚へたとしてたりないと脇あ
しく。とうめく。こもき希みの猿舞ぞ郭の弟子ハ
うふ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ尼ハたとし。ぞ尼とうし
うくもたとりぞうくもうくもうくもうくもうくもうく
のとくれ。侵海妻なうの男ずうくぞ尼と塚とけへ
きとう。あるうくの面約うりとれうまてそ門

の男げうお作うくぞやうくもうくもうくもうくもうくもうく
ぞ上人。行ときまたくく。伯耆。北条の男
とあうくうよりひくきくしまうたる郎ぶ一つどうる
うう。氣ちうくく馬ひよりくぞきまてよりぞうう
とうとけうづきうひううぞし
真
如うありひうをくうねてうどうあくそどれ前よもうう
男ちどうくうたあそくく。巻山院入西ぞたれうあ
孝ともづうち男くうのぞうくうくぞ郭ひやきく
ゆうどあてひうくれけうよりたりーの太郎ひ
とうやうぞ。ぞうくあの力ちぞくくひうひどくうられ
うり。源門。関大臣夜ぞ。出人ぞうくぞくそりひーや

[illegible]

[illegible]

[illegible]

寸陰わすむ人すくなくおこたる人多しためしよりつくづくと思ふに
ものゝ是をとりさめまとしまつる人くとめる人
となるもされも高人の一結とわすれ切や剣
那ぬぬしとすとりくるもの見ぬ紙をひくやまれまこと
命をおろそかにすちまちよりくるきれをさんちとと
や日月と惜むへうしんの品しの一念むるくやる
こと紙わすれ世人しのこと人業ちくく高命あるもの
愛うおりるへしと岩ちをしよりのくれ
多るるがるるとくるのくるるる

うえたまのぶきく 極とき
ゝ 紅もつゝゝなく
うゝふ成てゐやまちすゐ
を作ゝをうゝとなるもく
びつふくゝのゝゝ作ゝ
めたばゐやゝ天をゝ
ゝおやゝちゝ蓋きて
ゝゝやゝゝ痛るゝ
ゝゝゝ鶏ゝゝ天ゝ
ゝゝをゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ

そこいらをとの人の様表とそこひとすまくすく
やとうしやうしやうの人のるーーーこんこ年とやうくたを癌
ゐもまつれいこしやせとものんくこん人又是ゐ
おるーうこんしん同の儀式つまのこーこぎりこ
うこん世伝のくーーめこをおほくこれとうあーすこ
をこいわこひもおかく男もくるーーひの脳のおく
生を雑事ーのわ長ーを所ーーー

ちうとて。為義。法華の車のちりてぬらるる。希世の童子。
うちうちにて。法華経を。相ぐのひらとけまきて。
おくりの女法華経をよみ。[illegible]をのき車やこんる。
さいまつ丸をよまきりて。ぐーう。希世の男るりて。
法華をよ彫ぐうちあくくらまをぬ。ぬるりのさいま
丸を。太秦の男。鄭の山を剣ろ。ぬうまき
ぬよ。作りけるあ家の[illegible]ぬ。一人をひきくち。一人
をぬ。とつちぬ。一人ぬとろ。とつあ
られをを

百五十

宿行ぬとぬ。一人にやろくぬ。たくあつまるく。
九郎の会仏とやをろうぬ。ぬとりのろくけ。

ぬ法華をろ。ぬとやぬりやだりまをぬ。
為けまを。ぬをやるとぬろ。ぬくくひぐくの法ハ
ぬをとぬくくまくぬ。梵字とやを。ぬやをのきの所
ぬやくくとやを。一人。京国ぬくぬろをくとやをろよ。
ろくまをぬとあくくあくくくくくの。一人ありて。恨
さりやとぬひて為やとぬろとぬぬくくも
為ぬくくぬろぬ。法華作りをあくすくく。対面くく
てまくくくく。道場とぬけくくく作ろへくしぬの川ぬへぬ
いるとろくんぬぬくくくくく

つくりあひてごりふ死ぬくそだわろくこいとこの
苔をだなのけうこうやぢを天世こぼろんし樓宮道
字なでいひろ老ぞぬ妙るりけうこうや世こと拾こう
よけうく我独ゆくば法こと拾こふよくて聞浄ことと
とひ放逸至類のこと極なまとこ死こうろくぐ
ねこるつまうこうこのびくこ死くぐ拾こくぐ人のこと
つこしまうこふうきつき作ろや

百六 ち浄のちばりこねどろ法のねとつくろた
むこうの人こどこしも求をこうこのまこ ふやを
くけきろやび法こ学こあこ人こんと
しこうやうよやゆこぶこ むこくこ人のひこじめうれ

ぬ文字のどうしこちこうこ法なこ沢まやの事こもめり
らこ法こと紙りこ地こ灵設くあのむこば我の人死
必ある事こうここ

百七 なこもころふわろこ去ぜちうこ一ここぞるくやしころか
きこ人こ二こ法やうこ人こ三こ法こ病なくこ分つこ死人こ四
こ法こ滝こうこのじ人こ五こ法こ老くこ法こ死人こ六こ法こ屋
こ法こ法こ人こ七こ法こ欲ゆこ法こ人こ八こ法こ友こ法こ一こ法こ
拾こくこ友こ二こ法こ人こ三こ法こ一こ法こ
鯉のこ法こ法こひこ法こ目こ法こ嬢こくけこ法こうこ法こ人こ八こ法こ恵こ法こ
こ法こつこ法こ拾なれこ法こ法こ法こ

鳥よりも雑たむる紀伊国の湯殿

のうへよりもまさりすぐれたるものは松茸なり

なを中古以来のぶ湯殿のうへにぐろく棚よりの

みこうをぶ山人ろ沒のぶ流れしく沖をのく

やうにぐ山人ろ沒のぶ流れしく沖をのく

たまよりのてゆ〜こどうりひさ海あ〜さうすや

ちうく〜天人ぶ山人ろ沒のぶ流れしく沖をのく

百十九

海金の海よりうちの魚をぬきうひまをたいふ

きを拍まくぐ山人ぶ山人ろ沒のぶ流れしく沖をのく

のヤ伸〜ちぐ山魚をのまく〜ぬ〜〜せまくいたう

ちうく〜さ人のぶ〜ぬ〜〜ぬ〜〜ぬ〜

大そぎまりつと海をくぐつてめくらひとれば
ぬまと家ことおあつ和なれど球実くおりてめつて手
とことあつまりんでそおの島歌すくく用る死和うら
もつけさものをだりよこめぐさりとはれ荒島
を頭とをひ絵よめくれてあとしひ聖山となく
熱やひけるに思わるる月よあつくあるくあるそ
ひわくん人見とたのーまんや生紙るーめくと貝と
よろこーひろを祭紂うひやまを獣うるくと恵を
林ふなーつとみくせくのなーれどくへるー
めくるあくひなりつくー禽あやー天歌国ー
やーるとまくーれどみくるれ

人の支絵をどみあきくうてーの書とこれること。
書一とひぬまを手書事ひとをくしはなく
くをとなくめくしを学問よ海あくんたあや頃よ
聖術をるくあるーが月と夜ーるひ人とよを。
忠孝つくめも聖ようあくすへばくへくも頃ようう
紂馬ま素ーに義ようを出るるを是とくく幽。
文武聖の色神ようきくへばくへくひ芝学
もんをくくつくなくんとりんをうーすだ頃よ食
をくん人の金やくく味と。調ーまるんたるんを
へーし頃ま細をくろけよ要おりーひおくくも。
多紙をを子のくつ処やを論ようくみよを

行ずまあるくそ遊宗の色衣臣是くとかりくそやを
いるとくと今の世のあれとりらく世ばおさひ
ゆ色をうやくをろうるるはらと金をまくれ
大きくと藏の蓋おくきふしくきうくく
百廿三
色蓋のくく紙るくばとうを紙色するくを
俳ゆくくとくくしく國のためくれたく
色むくく紙ひをくくくるをくまるおけくをわく
つの脈ひくくくるくくひなくくしくの方ゆを
くく紙くくくくくくとるひ形第一は食物ゆ二はき
れ相ゆ三はあやくくの光事ひ三は八色を
紙ゆをうくくひ病色はをうきれすくゆくくを

を樂くくひ江人治病ゆり病はをうきれゆまはを
ゆくくくゆ醫療とわをくくくくを
くくゆくくくくゆ紙ゆくくくくくを
くくひひ四のゆをとゆくくくくくくくくくを
ゆ俠物くくはゆの人ゆくくくくを
百廿四
是江ゆ師をゆ浄土宗はくくくくくくを学道をた
くくくくくくくくくく

やがてこれをつくるに、あつまりつどふ事、おびただしかりけり。
いくばくなほどとくんだ道にて、虚空の物をば、はるかに
なほざりにしたるまぼろしの人
道師につかめやうやはきへうせみ人よ滅をしゆうこ
とをのまこせさぶらへ人よ志井をまうしとすうを飲
ゝくんとさうしとすうおうこうをもやこ二ゑまこし
此矢さうをはなれもしのくうろ時をこ我部くどうなよ
人をこどもきうめやをの道を解くみーるこんを
うもめきしとやたに飲うくきうあうろたりうろよ
やいこれうるまき

百廿六

だくちの戻ぎこまるて法のなくうちのまうしとをん

百廿七

よあひてうをつづくうをたをけくまくうつをを時のぶ
たまうるとうへしをを時とこうろ法うたぐうちとうの
なりうとあうろ若や矢
ひくく笠ひたゆ中ハ改めくどのーとするや

百廿八

雅屋大須ふうぐ者りーあくうたん人うくだ為うも別さ
うやとなりーいうたはぐ法のをなりう人ふしはるのーま
うくとうんりつぐやきれの道をはるうとぐをうを
のりうまお雅屋つ雪まうくうとくげをうう大のぶと
きり伯つう法中陸の定うるまぐ伯つぐもーさうれうる
ぶうくうーくまくなりーめーくく日来の所乱々
をさうひ屏きりーけはうりうるぐ所りうの人雪と

りてきたりけるハ四つひとれとだのう〜六位なれ
こゝや虚ゝ不使なまとゝ〜〜〜

まーしたるもの人くとうとうとまつ事おもあり病とうろ
ろもおたくくもひしるとうくおとうとうろ病を
もくあーあ茅くとのこて汗とおうるもろーるた
あくわまくとと一日飛おそろくくとあれもあるあ汗
なるすハ江のおりきるもといふくくもくしし浸ム
の家と書て白ひの人となーためーるたよ船を
物ふあくくくひをのま張まをくくすくくうひわ
弟と始ーくくんとをふるまーうもろ汗の
遊ーと勝方とあの者人を勝く奥あんたあるら
をのまの義入ーまくくくくる張ろうふ物まハまを
てげうたくおゆくくよくと又ろくまくらるだうくまあ

てんと怪りーりしとむくくあるひの奥ぶうしし
人ようりおくくむうきくく張ひと動ありまーふ
ひうまくくくの中ーふたりあるくもんくとうのうさ
をの走うあのまくくひくくくと奥くひ乞又礼あく
もうあまくくのーの奥寡ろおうくくるくくん振とム
まんくくひおりーを皆あくくうひとうのひ先やんよか
たしくくと思くくふ学ムしくくをとんよまくくん
とをんへしをくとまるのとくくハ者よかくくひうも
くくよあくくくんくくすいのくとろくくよあやん大
なる識とと辞しあとをくくやふ学ムのらくくや
まくくさあや賊とりくくれくくを八分と

りつく。礼こそ。をのゝ子とゝ。つくゝ。ぬぎこそ。かけそ。遠
よやひと。なりとゝ。つゝ。ゆゝ。ゆゝこそ。ゆゝこそ。人のうやまゝと
なりぬ。ゝをこそ。ゝゝ。ゝゝ。ゝ井。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

くしつゝ相のこゝろをくやみすぐしさ紙四ひぬこゝろ
紙ぬ紙ゝこゝろをなり六歌くゝひとりゝとゝゝ井
を思ひ出つゝめさびの富よ山ゝとゝのゝゝゝゝ
ひとゝゝつゝめ望月ゝ（十六夜ノ月ヲ言フ）ゝゝ海なゝ紙キゝのゝゝく。
うゝめゝゝゝゝゝゝ（古ヘノ）ゝゝゝゝゝゝゝ（あさの月ヲみるよあつまのゝ）ゝゝゝゝゝ
ゝゝひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ

双六なとあうひく。技数ゝ人ゝ
つゝ人ゝ向ふ。ものくさと作ふ
あうひ。ゝつのちゝ
つゝ。ゝうひく。一事ゝ
てゝあうゝと。ゝひゝ
みゝくゝ。ゝ
とゝ。部の人。ゝ
ゝゝ。ゝ
人のゝ。ゝ
ゝゝ。ゝ
美ゝ。

思ゝゝ。車ゝ
ゝひゝ。部ゝ
おゝゝ。
ゝゝ。
車ゝ。
ゝゝ。車ゝ
ゝゝ。
ゝゝ。
ゝゝ。
ゝゝ。
ゝゝ。
ゝゝ。
ゝゝ。
ゝゝ。
ゝゝ。
ゝゝ。

ちうぶ人こうをうん坂。京方死ぬへきよぶつきうこ
たりとをだとおくぶもうつきをゆへしぶたう天うぶつ
もものはぶとのくぶうた完とあきこんしよぶこく
子ぶもくうとつかとこおこうまおくぶこうゆう
もやうこ清きゆへし部のゆよぶたう天人ぶかさう
日ぶあうへこもぶ一日よぶ一人二人のこだんや鳥部
聖船器ぶこゆ聖山うとぶをくうもぶたうう日ぶぶれ
とをくゆ目ぶうぶこぶもぶつ天ぶひうくこの。
つくりくぶうちをくをこうぶゆうぶもうこもぶつよ
きうこもうこうぶ思ひうをぬぶ死ぶうのぶへまうく。
のうまこきふけうこぶあうこう天ぶ不思議ぶもこゆも。

世こうとうふまこ思ひうんやぶここくこぶつよ物こ
紙このぶよこ清くうこくたてうくへうう紙ぶこ
まこんぶつまのいうくこもこんねこもこくへうくく
ひこうこうこうぶまこもこうくうこんぶのうこんぶまこ
又うこゆまこぶこんこまぶこうゆ天ゆくこうふぶつれもの
うまこうこうぶ紙うこ紙のぶくこうふううこ紙こうこ天
こ紙しうこく家ここもつこん紙をこうすくぶ世こ我く
ひうくぶ夢こうこ家こうこ紙こうよ水ひこうくこうひこ紙こ
こここうこくこ思くうこぶこうこうこぶこうこうこぶつこうこぶの
行くぶ逝夢のうこ紙ぶこ清ひこくこうこんやこ死こ
のこのうこぶけこうこの坪こうこくこうこうこ死こ

夢色めきし涙の袂ぬらしくゝ
そうとゝ
ゝとゝ
ゝとゝ
ゝ

はるのそせいはやく成行くすえの野の花をの
さくこれひとへすくるうめ八重梅やう
の梅のりやうとうくわぢをしうをぞとまうす
をそさくこれをさきまして一のつゑをむつの
梅をぞちつゑをそなる梅ひとへなりのやくさくこと
くさなるをさくこれ紅梅の句ひめくこれをこれなり
をそこれ梅をぞ梅をさくこれあひくこをこをのとき
まくこをすやこつゑをしひとへなりのを
さくこれをちくこをぞ京極へ道中納
言ひとへ紅ひとへ梅とうん梅ちくこれをけり
京極の座代重ひきふいまこ二年ゆくかり梅又梅ち

あり月づるこのけつのめこでもくこをこれの花をよ
もぎのさつこくけてこれ梅をうたち花をつこけつな
まをぞ梅ちりぢやさうこをこ山吹ぞきり
たこをうをこ道ぞ秋の草一へ萩薄きぢうう
萩あり花ぞちりどりをぞたこをつきりこうつうやこん
たこうをこ笑草もつくこをぞ梅こたつきをぞこをこうう
のこをぞのくやうこう遠ぞ
世をまれなる梅のこめこれ
きあすこをこをつこ
やあつこをこれ梅をぞこうこ
さやうの梅なくこをこうこ

方死しく賊ぶこと
ゆ。若のそこら処や。
ね
拙くて人をこそ
ぬ。けくなくぐれ
めきんとはうあ。ぬ
ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。

くて。ぞ。ぞ。のごまやうるぞとろぞとまれまへど
りやと思ひしぞ。ぞ。一こと。とその娘ひとくすまとく。
ねやうるあーこぞ。ぞ。ぞ。

人まきまきくゆもとうしひせきまゝぎゝく凍霧の
くろゝあゝだゝうづのきゝたゆくゝひゝくとるゝゝの流
をとうさゝゝめくゝうきとゝたくとるうしゝ。不坂のつぎゝ
さくゝつゝゝでゝ人紙めくゝひへきゝるゝゝぎゝよりをぐ
ゝ。ゝたゝりやをあとやめゝ民とうぐ農ともゝめぐゝ下
よあゝしゝゝゝうひあるぐゝゝも。安食ゝのつひ
たうう人ゝよ。俳ゝきとゝ人とゝそ。海の塗人とゝりゝべよ
人の孫寿のあゝきまゝりるゝゝゝゝるゝゝ。人のか
たうとゝゝうゝゝくゝこづのゝゝくゝゝこんずゝゝゝくゝびよ
くうゝべゝゝ紙をうゝうるゝ人ゝゝあゝゝくゝとうる相
とうらとうをゝりゝゝうゝゝぐゝもゝうゝひもをのきゝゞ

あのむゝうゝゝかゝるとゝうゝゝそゝ人の日ゝうの年ゝゝよ
ゝもゝつゝゝずゝゝゝゝゝゆゝゝきゝゞゝゝ事ゝゝゝ拝ゝゝ人ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ壬ゝゝゝうゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ちれのうとて
海原の秦宮の前の下雲入宮と係弧と藤馬の
相うつ人まうの絵くゝ作ゝ作ゝ
まゝゝゝゝゝひ思ひ思ひ
まくらのさゝ長しめうゝ神のゝゝゝゝ人ゝ
つゝさていつゝかう相ゝうやゝ人のゝひけまゝさうあて
地しゝうゝくゝ帝文の馬とあのゝゝゝゝ相ゝと
恋ゝを作ゝうゝゝうゝゝゝゝゝゝゝゝゝ伸
ひゝう

十

明雲寺の上おゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
やゝくゝ踏ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

十一

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]人ぞくをさそひ狂をすすめつゝ
人よりまさりまさりうちくだくるもひえくだらぬ
らしたりいやしひうくるもよつのかまやで
おくいかんぐ慕もぎうひうくるあーいちろ碁囲
うちうたちちまよくよのゆまーつくぐうーつまぎ
らくまくうをぐ和をぐ法をぐ法をぐすくぐすーるむ人ぐ
そ性ろの骨ちのまくをぐろすつまるぐをろのませ
をくくく年波をくれも塔紙のまーかまくちちまを
法井よよものを法よるる泥をぐくよゆくまれて双
ちをまりりくとうる事ゆやぐ下の相のよよとくくもゆ
ちぐ不婚のぐくもあり、愛下の疑隣かつまをまれ

高

放將をまれも世れ
法をぐくるくを人うくも
我人のくくく年又十ちるうゆくよよまるぐくまれ
慈をくぐよつくゆ世ををなくゆへさ約まりすーむ
人のるくを人くくくく

むとなくしくやまもしさ。第一の事なる
十五 和大ち。弱ち。よ人。勝うまもる。肩ちろく。誠ちまくた
きくろうさ海うくく。肉素へさつくま。ろとろと面
肉ち。肉大臣。後ろ。ろうとのぎーちやとく。絵作
のきうくぶりけまし。賢物つごまとみくく。年のろ
たろうひとぐやーあまたの。後日よしくく犬の波もーく
老ちーりひて。老ちきさろくとびうをてじ。氣父た
うくくみくくひとくく。肉寿へさのくをくれしろ
ところ
十六 ある兼大。物ち入道。ーくくくくれて。武士ちうかこみ
てじ。波羅へおそ。ろのきまし。賢物つく一。永ちりうて

見とみくぶうふ。滝山ーせうくし。思ふくくうくち
ちりのまとそぐくまけり
ひ人。東ちの門ーおそ。ろぎーれろまけろうぐくも
めとも。ひうつまちまぬくうぐ。ぬも。見とゆろゆうく
くろくく。ろくくぶ。ぶーぐーやうくをみく。
とろまくくぶくひ。ひりたくをのやむ。ぶをもろうぶ。ま
まりと。思ひてまりろまぬくたくふやくくぐの奥
つまくぐまくくうくまくれけくれもぐくをるうる。
ろくーくーる。物くくもーく。思ひてゆく。海ぐの
るぐ人。まくとこのてぐくやくく。曲折ろくとりくぶ
て。目とろくくーうくも。海ろくは。物と。ぶをもるうり

なるとて、奥なく、ぜんこれしゆ、ごくてんにてまとも
これ、姫をくらんとたりぬ、ゆとをそめくをそのや
世すゝうゝうゝん人をぞ、横恠ともうんしづつくわ
ゝ天王寺をぞ人の耳うをもゆゝひむをもうひてを事
ゝうをんをぞうつぢちをてゝどむめぐきなり但病死
うを、ようゝを死ゆゝを事のゝ横恠とゝゝをまだいく
ゝゝをゝやひをゝゝゝゝ生産吳藏のゝつゝうゝゝゝざと
との大事ゝをたゝの天ゝのゝこれをちゝだけゝゝゝごとゝ。
ゝゝゝゝもゝゝゝゝゝもゝゝゝゝゝちゝおゝゝゝゆくゝのや
ゝをもゝゝゝ但ゝつをゝく、ゝをゝゝゝゝゝゝゝとは
横恠とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

むまゝゝをなゝをゝをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ぶよぶよ浮こしまくらく来るおきのひくごとくうるんと。
磯ちかまつかのこつくのごとく

十九 大臣の大賓をひらくへんかくどやうきくおこるゆめ

のるものゆゑ波左大臣ねぢ東三条ねまでおこるうち
関白すくおのけうとやうまたうちくくれ面へ
弱年わうまたちぐ多くうこのうきるのまくるものの
出家なくのやおうたくくそ

二十 多くとくまくし拍うくれ楽器くとられくきくとくんと
思ふ墨くとれくし風くとおりひざうれとまくし撥うく
ひとれ思ふひをぐまくぐくうるくうち
只者のあくあまくばうをくくすおくくさ海りおく

教の一句とみまくし波となくおなのみをみ面京小
すくく実年の拙とおくくひくく事とあくまのく。
いさひくくとひくをくくまくうくくぐくるくくんや見
男ゆくくの益なりひひくおくくすくくるれあまく
てぐぐくくくるれくくくとくくおくくうくくくと若葉
をのくくう海をくき散乱のひなくくも縄床くぐ
をくくれうくくくくく禄宅くくくくくくる。
二なくくくのおりくうひくくくくく

をもつてうやまひしとやいはんしかのみならず魚
鳥すべて海とのうへにいでゝ日月をあがめ
とそ[illegible]をれし

廿二

ゆふむきをひとつみてあるひとつは焼とうよ
見よはいかにまことにいろやんことなる人作りしなり

廿三

みすくいつゝおやまるなり
門よ家のうへをつくりいつゝみるまや弱竜のか
ぶのごとく稼いつゝ家くるとばくさまひ気見酒の撰数
うつもぐりぬやひゝるるうつなをづけるを
さんしきうまつなをいつてし護摩さくりよ
をまろ〳〵海をう護摩まるなをいつゝ[illegible]

廿四

花のゆうをゝ[illegible]ゝ百五十日をとゝ[illegible]七日

廿五

適呼るの系仕法師の島を日〳〵ひつきて芸
のうちきくゝとゝうをきまし数も
きゝ千ゆつゝこのゆうゝ姫をのまもゆるくゝてこあて
をゝへつゝゝうゝけゝゝひたゝうくゝゝゝ
うるゝとをゝうまゝハさゝそゝゝをゝをゝをゝゝ
おのゝをゝとゝおゝうをくゝゝみうゝ大弱をゝゝゝ
あくゝゝゝ海海ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

けきえば法師とどうくぶらを使庭へ出さ
つまらぬこころを家の長もとらひようをさうをくぶ禁獄を
られて出るとき後大納言別当のぶようの伯きら

廿六
太蘭の太刀を踏うつうさをしつる陽のと
きうく相論のりうをたちちらへ行一ハ
年の自筆のたんのうよりれうの記を来
冥白ねよりうらうくぶらとやた

廿七
女の人のひとりの時ちくもぶをちうとかしぶ
ふ祭あるとをくときくにおうくをを宮の使や
世間の浮説人の是恨自殺のためよ失おうく滑と
ゆきうををとうくう時ひのひかを宮のきうり

廿八
とうくうくうくぶちをを
あつまの人の部の人よりつをとらみこの人のを
書ようゆきくぶ分をとうくぶ年ちを山をとるれうら
弘長の俗ぶくぶ俗よりすぶ人はを
ちうくぶくうる

廿九
人間のうくうをうくうををぶ紙みうよりをの日よ雪
仏をを恨ちくぶをたりあるよ金銀財をひぶをひを
いうをうを雲陽をぶくうをとをうをうをうをそうを人
ををうくぶうく安を重しくをやを人の命のをのをみう
をうをぶをうををををゆうくうを宮のうくうをうをうをうを
いうをうをゆうくうを宮をれをし

一道はるかなるさとに人あり。ぬるのみ一ろよのそみて。ゑがとうるるまゝにぐくそそるゝ。はゝとゝうひじゝと思へるこゝろづよのことなれどゝかまろくあやゆるるわざゝぬこゝろのぐゝ山ゝくはゝこゝおかゝゝやまゝゝ。ゝかなゝいさのそんとゝいひてありうんゝ家おもとどるまゝ出くゝんはあゝそふゑ。ぬのあるものゝぬのゝ旅ゝこふきゝ軒あゝるのゝぐゝそゝとうゝこゝらゝゝぐゝひゝるりゝんゝくゝ老ゝよゝたゝも。ゝ。ゝ。ゝ

ゑうまとづつくまけくこゆ今ゐやはさまよりあとづひく
みくけりんぞんあるこもりちもまもこぞくろよぞひちもも
ゐこぞひくうまのぞまもあこぞあくゐゐまやまきあこぞのつ
くこあやまうまこあつくしぞひくうもやこまゐ
ちくまるくこひくうゐ牧さくゐこみちのあくー
ゐこまぞけくゐくしあくくちくゐくるぞゐくちひくゐ
まおくるくゐくぐくもあくゐゐ人氏ひひさ
うまくくまこあくまくまこ思ひちくこきくあくこ。
いくこうびくー

卅二

何事の式といつくゐ坂渡戦の沙代まくくゐ。
いくこうけりくこゐ猶ちこのくゐ何ちくこ人の

卅三

ゐくくくくう事こけりくくこ人のくうこゆくくはくくゐくゐ。
用あつまくこけくちゐこゐくくこくくくくくくくくくくゐ
くくくくくくくくくくく

ぶるたどりうしはあのうきうるをあらうるを七院
籠のまつこの眼張をあるへきぎしぬぎてこくたる
ゐ人の乗つまくのとうよ泡沫しくゆりめうぶと
うしぬよみをクくぬあるをひとるをいうのひひ
をうをもうぶとうまて

畄

貝とはほかへの家へなりとをきくぬをとうん
ちくしくんれ袖のうをひうの下まくぬとうう
まふあうをうしへよりれぬくおりかへよ
うまくるるをなくぬうとをみしをくぬうう。
はほかやうるんとおりくおへうり墓繋のすをよ
ろをうをくをくをく

と張ちゝさうや高のゆきゝ三前と張きゝ
さとうゝゝ酒とちくまゝゝきうゝ
日うえ時色血氣こらかちひ地ようこゝく活歌
れ浜ゝ分とあやみめくゝけやきたる障とり
らゝ山ちゝ山ちゝうゝ妻離とあのこて家とつりや。
見とゝてゝ若のたりとゝ妻つまいきめゝ山りゝ
しゝ地ゝあゝうひひうゝ砂ゝやゝあのひ面ばく
まゝくゝまゝゝすゝ実ゝ陽ゝめゝきゝ砂とつゝきき
うゝゝゝ百年の分とあやまゝ常とゝうゝたた
めゝねゝくゝゝゝてゝ分のまゝくゝひゝさゝうゝゝ申とに
見りとゝすゝきゝうゝくゝよゝひひゝきゝくゝうゝ入世ゝくゝちゝやゝこ

ちうゝ分とあやまゝつゝこゝやゝう入付のゝゝいきゝ如ゝ光ゝゝゝう
人ゝ精神ゝ相ゝきゝうゝゝゝ
面ゝゝゝ山ゝをのゝつゝゝゝ
ゝゝ分張ゝたゝすゝけゝく魅ゝ
ゝゝ分ゝ名のゝ見うゝ入付ゝゝ申ゝゝゝ
ゝゝうゝの若ゝゝゝゝゝ
小聖小町ゝうゝゝゝゝゝ
ゝ海ゝゝ玉ゝゝゝゝゝゝ
とゝゝゝ従ゝゝゝゝゝ
ゝゝ大師ゝゝ筆和ゝ大師ゝゝ紙ゝ用録ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

小雪のよう光。大ぶつのひめまつぶ雪のやうく
なりてぶつよつぶかとまつることるに弾よしぬ
人事おぼうるゆ。ぶ紙のしむ。義康のう
きうる。異ぶ光ぶ事ぬ。ぶこの紙ぬ。くぶれ
よあるぶし人のうつまのぶぶ。ぶこんだみ
ぶとうぶぶまし。ぶろうるう人ぶ。ぶぶ
きぶのひ。ぶをとらんや

世ぶるぶことのぶぶぬどもあつることるぶまつ
ぶとぶくぶ井ろまをるるとぶるぶ
なるゆへぶをひるぶぶのひ人のうぶぶ。
員とひぶめ人ぶとぶのぶぶんぶぶしぬ

ぶるとぶるへくぶひきぶくぶくぶのまをつれぶ。
うるぶ。ぶ人をぶぶるうるぶ。ぶるぶ人。
ぶ。異ぶ光ぶ人ぶ。ぶ目のまへにぶ事の病ぶぶる
ぶ。ぶ浪をぶるぶぶの。ぬぶぶるぶ。ぶ日ぶ。
ぶるぶめぶしぶるぶ日ぶぶ。ぶいぶ。物ぶるぶ。
ぶひぶ。ぶとぶ。ぶるぶぶぶぶのことれ
ぶぶぶ。ぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶ事をぶぶぶぶ
ひぶぶぶ人ぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶ。
ぶ。ぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶ。
ぬぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶ。
ぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶ。

たしかにやはりくぶつ
まくみやうたちのぶ
とつて人をも思ひ人
おかくるばかりゆ
てうつの気色
ひさむうこれ
うちのぐ
ようぬ人をいう
くひさまあ
ひ年老さ
きかとうぬ

奥ーみち人ぬ
いつ事ーとう
酔ちこ
くそろ
ゆうぬ
ちくやもち
ひゆきく
ぬ事ちち
のうぬ
たくとゆ
差あるぐ

ちかく賊とうしうひ病くとまうく百菜の色と
きいくわ弟の病を魂うるところおこれうまくと思ろ
とのをとこひさうくそ思ひしく。
なくるる。姉の世を人のちをとそうるひ美振を
をくしく。やれくくくくく。逸抜まくろづけ我とあり
て。地獄に落つし。魂とをくくくくよのきをくうく。五百
生のうをなたをのく。仏へ祈るれ
聞くうとくくくく。物たを通とそのづくくくくれ
れつをくしく月の夜宮のあ。た乃をくく
をひけどうよ。物語くく。亜妙くうろげの鳥と
うのうをくくくくれくくうく日思ひのおくなのきて

とうとおこうひさうをひなくくくくくくくおお
たりのみをのうをうをれくくぬみたをくくやう
うをけをひくく。山出されくくくくとくくくれ
而くくくくくく物いうをうくくくくくくくくとう
山むひくおくくのくくくおくく孫のうや
野山をくくくくくさうふ伯うれるといひてくくその
上をくくのくくうをれくくふくくいうひ人のをのう
きてくくくくのくくうをくくくくくくくく

ゆくさきのゝ酔さめて
あるじのひさあをさくらよりかた
なるゝぞさきのゝ
きりぬひきゝろひくゝ
ろもをりひさくらをそ
ゝたのやとをくつゝみし
四十
里戸ハ松はいつ位よりをぬく若くさ人よりて
しまゝ〳〵河ぞうるゆ一ぎをせ行〳〵と色のくゝぬ
ゝをぬをるゝをぬみちさまよりけれハ里戸
といひてそ
四十一
鶯食中書うとくゝ鶯
だ遊のうゝのぎりひせたゝつぐをんとゝひこをけるこ
作〳〵赤湖波へ道のこゝろをゝ車ゝ行をてれ
なくゝぬりゝをゝれて一庭よりれて泥ゝのをつ
ひゝなりをゝりゝをゝあゝ用をゝりゝ〳〵と人
感〳〵あくつをゝりゝぬるとゝりゝ〳〵ゝ
赤西中池ゝのゝくゝをゝぬをゝハなりゝをゝ
のゝひゝをゝ〳〵ゝぬゝ〳〵ゝと思ひゝを
ゝこぎゝをのゝつゝやゝ〳〵ゝやゝの中や庭の波を
中行をゝ人ゝきをゝぬゝ流ゝをゝハ赤ゝをゝそ
四十二
赤ゝのゝをゝ〳〵ゝ肉ゝ赤の作弾奏とゝ人よ
ゝをゝ〳〵ゝ賞歓ゝ人をゝりゝのゝをゝ〳〵ゝ
をゝをゝをゝゝをゝあ家のをゝ〳〵ゝの行中

畫古、庭の所縁よくうつしぬまてたのびやうよいひさ
つまつ。ぜくうつさぎうのの人ゆる紀典侍ありたうこうや
四十三 入宋の沙門道眼上人。一切經と持来しく。古法蓮
のわうつるやを書とりて入所よ。安置してでくに青摩蔵
法と。海しく那蘭陀ちるとゆうそそまのやさ行
そ。那蘭陀ちるそ。大門ゆ。むきやと。江南ノ流くくい
ひつくへまて。西域伝法伝。ゆ。ものよ
西域伝。江南をつうすゆ学ままくゆやされいん
北行つうゆ。唐土西ぬちるそ。ゆむ。天竺海ゆうと
ゆ。天竺。されちやうそ。四月よ行てさちやうとい
と流ちるそ。神泉苑へ。ゆ
ゆ。焼あくうやは成就の

四十四 よくうとちやをそ。神泉苑のの書紙ゆふるり
ゆもくこと雪だしでのこ書とゆふるひつ。ひ
たうゆ行ままた。粉言とゆふたまれこ書とゆふる紙。
あやまるまてたしたものとゆふやるやまのまこよ
とうこへしとゆうこのしるまゆ紀ひ。ひ
新年ゆ。島ゆ流ぬ。ぬさたくぬくしあくまれ海
ようく行ままけう四。漢波典侍の日紀くしまこと
四十五 四条大納言流新つくくびをとゆふ物と行ゆよ系を
られちけうゆ。くわやしさ物ぬうやうあくしとく
のやけうくものくぬ大納言鮭とゆふ魚ぬうねくよくく
あくしまうれぬけのちうり。行系くのあくを。

鉢のもりものさいくゆりてやさきなり

四十六 人作く牛をこ角をきるとぱくふ馬をこ耳をきるして。

そもるーとひもるーとつをきーくぱくとやばらをぬ

おるぱゆーのらぐなるぱくふぱをぱやーるひるを

うーびぱ是くれとぐわのぱ津ーのやーめるり

四十七 相撲守四頭の勅をぱ松下殿尼をぱやーけるぱ守をられ

中さるくをーるをけるるよぱくのるんぱるるまゆぐーのや

おまぐるのを裕尼をぱづーぱ刀ーくぱるまるーつ。

きるんけきをぱぎうどの漆仏義家。をのけいめるーく

ひけるるの折るるくぱけふのー男るぱるーをゆるんさやう

のをーるぱひさるをーるとぱやーされけきをるぱ男尼ぱ

綱之ぱるるをまるるぱ俗ーーるるを一月つぱるれは

るーとぱ義家ぱれとるるとくいるんをぱるるうよるや

もくゆべーぱ。をぐーるるるのもぱぐをるーくやとぱるさゆく

中されけきをぱ尼も。後をゆるくとぱるりくるるとぱ

りくるるぱるりくるるるぱるるるくるるるるるくるるるるる

四十八

城法奥守泰國をゆうる馬をゆうるひと
きゆをけうよ是をとそろへくちきたをとゆゝつこや。
こゆる紙みくもゆ是をゆうきめうゆるゆうとく鞍とく
ゆりへをたるとゆ又あゝ紙のくゝをたうゆゆつくゆ
是ゆ是をうよくゝゆうやちうへしとくゝのう
をうとゆゆ是をとうゝゆしゆうゆるとゆたうれうんや

四十九

表四しゆゆ茶のゆゆ紙ゆるとゆうをのうり
人のちゝあうゝうへゝうゝすゆちうへし茶へゝるとゆ
まうくうくゆたうゆゆ而をとゆたへし次くよ
くゆいくうのゆくゝあやうきをとやううとみくゆたうゝ
紙ゆあうをゆきくるくゆうすゆちゆをうゝ

を馬茶をとゆやゆ是紙ゆ紙ゆうるゆゆうゝ
茶をうゝをゆゆゆ

結ぶとてつきぬ学問と
こころもじゃうやうをなぐさ世と色男(のとこ)の国
こころぶつ目のお代(え)ぶくろのごま

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

くもぞ〜そうしんぷ
てがう佛どまりのあ
あるこゝろくしまつく
おいてにはれ子ども
さ男なくるあそ
さ海ぢえまつく
うひつくまそ
もうあふこそ
こそ年見てくも
いまふそくどう
ぬこあくぬのもへな

三十一

きこうきしのみ
こうえぬしひ
らうぬやのす
ようのうぬそ
てやうさんぷ
ようそひこそ
ぬうちあくさ
いてこのやう
のあぬなれこ
まれなくひえ
ゆをるしぬを

三十一

五十五

弥陀ほとけの人のまへにて

五十六

くるまき人乃ゞとまるるまゝ

ゆうまあるうへの人のうしひつてこなたの人の若くつ申うるま

つぶさくゝあくゝみすうくゝあたの人ゝ義よとろう

かるゝ紙みくゝおのきのもふゆゞすゝぬゝぐう後

ほのあたゝくゝ歌とゝ人のちゝきくとみくゝおのき

まくれちゝと思りし申ゞたうあやまるとかうゝしゝ

字の法師ゝ時代の弟師ゝうのひまうるくゝおのれは

しうすし思くゝくゝもあくゝしひおのまうゝ流男ゝ

うう物とゝおゝうゝ人すゝ見ほすくゝまゝ

五十七

五十七

五十八

五十八

五十九

五十九

五十八

五十八

五十九

五十九

五十八

五十八

五十九

五十九

ぢぬくれぬうちあるべきと思ひ
まとなりやうむ人あるべきなりこれ
をとりつぐべきとて人なりとて
もいまだ若つかうまつりもとりくの事なくて
ぬんとおぼしやうくるとて人ありこれをこの
おきてとはめるとぢぬくべきもあざもうどかん人
いづくにとうとおぼしくらくとありひく
人あるべきのやうにおぼしてとうの人のあそ
ぶとこの人くうくうかしこまりもうしぬ
ゆきたれかくしあくるうしの人はぎくく
ひまくとみしくとうまくうれよの神どうしく

仏のやうのぎくひくく仏はまくどうまくへいのく
きくまくおくしひ

五十八 来人久我縄手とどまりつるかの神よ大ひきくうの人
まつくうの地蔵菩薩はやはりひくく金
ひくおくひくりひめくくみくやくくよ将家の男二三
人ぢきくおくよおくくまくうくうとくとて
ひくよくるとく久我内大臣源
よれくくまくりくけくるく人くて
おりくりて

五十九 東大寺の神輿東寺の門源氏の公
ぢぬくまくりくよ委大将くくくくとをひまくと

お伝門お国祇園社頭に踊りけるを見物の家うちの中まいぞ
きそれを法多の踊舞をぞ山の家にうつられけるをぞ山お国が
りをとりくに面をかぶりとりくに迷さらぬ暮れ
面を面神をぬぎとりくあるよ神社にくぼぎをとり
動くごとりあるとりそ作り迷けり

六十 法ちの作りをうすあるす定家の如殤といふ事
色表式をみくびすくに蜀さるまるこ人乃
面をかぶり

六十一 揚乃分りをうをそ揚乃目といふものの故事
要畧あり

六十二 揚門の約宣法市の中作りそ唐やそ呂乃國や律の
当乃和国そ学律の国すくに呂の当るとやを
六十三 呉市を象ひくに法市を家ひろ法海よをよ法市
仁当法のあるをるくに拙られくは呂行なる
六十四 延元下京の亭部源をあるはは下京内るは延見や
六十五 十月を神社月といひく神事をくうへきをそ
ちるくくはのとをみをとこを仏蜀月法社の
乗るをあるよ法ひあるう月ちるの神をる天神
宮くあるるのをたいて法あきをそ社る
さる事るくを伊勢をるそくを月をくへさる
をなりの十月法社の行事をなるおり仏れ

かくて。不吉の物や
五十六 勅諚の。あるよ。鞍くら。泥洗。今そこそこ。ぢろくへる。
豆上乃。泥洗。たうぢ。世の中。乃さうしーこの時。
そ。弗。ゆき。紙りきーう。鞍る。ゆきの。弗。といふも。
鞍りきーれるけり。弗や。者。鬱長の員。ゆきぞの
家。ゆきられまそ。人おいーぢ。ぢきーくのちと
の世。そ。封。とつくくくーふ。なのまりの。花人。と。ちやく
くくつ。時。そ。拷。ゆきよ。ゆひつくなり。拷。花
ぢ。ゆきの。泥洗。もいきいつ。わ。ゆまへ。ゆーとて
六十七 ひ。敵。ぢ。大師。勅諚の。起請。といつるすいは。越。後。ぢ。
書ーーの。紛けりくる。起請。みとりふ中。洗。曹。ふへ。そ

ゆくそ。ゆーゆーへの。生代。そ。くく。起請。みとつ。えて。おくる
そる。改。そるる。紙。を代。ぢ。事。添。事ーーくや。又。洗。今
ゆそ。水。ぢ。織。くくくも。へ。ゆくそ。けり。迷。あるへーー
六十八 洗。たちる。ぢ。大。長。没。換。地。妻。待。の。ぢ。通。乃。時。中。門。ゆく。徒
廊。の。評。定。おこ。ぢ。られ。けり。ゆーふ。者。へ。章。亀。の。半。そ
られて。廊。のうくへ。ゆく。大。理。の。注。乃。そ。ゆ。ゆ。うる。ゆ。
の。ゆ。ゆ。ゆ

かしらをけづりあくまくとりあつめ函奉
なりけるぞとうんぬやーこの紙みくあやーまさらぬ町を
あやーこうくつくぬをうとうくを

六十九　飛山城くくられんくくぬをとひうまけくよぬきうる
くらるくぬをとーーひありあつまるとくる塀まくる。
ひぬの神なるぬいひくぬごとのうくどやけまをいくく
あるくをとぬ勅回あるをけるよみるくくるどこのたをとーめ
をくる拘るくぬいうなくぬ塀まくられくくーと皆人
やきれけるうあのをたくくー人ぬ主ムよをくし出ぬ
あをとぬくくられくうぬ紙をくつをとうぬなをくよ花神
を祈るーどうひつくをまぬ塀拝くーどやされ

七十　たるとれを塀をくつーくく蛇をくぬ井川よぬのーく
くるりぬみつよくくつをなるりくるを
紙文なるの紙をゆみつーぬ山下るをたなれるをくくて二
をるのうちの中をひぬるのうーらくどのをきゆくーひきぬ
ひるるをちつをのまーぬいやうよをくるをくぬ花巌院
弘覚僧ぬとくくぬ紙をくり是をぬふけやうのるや。
いをくくーうるくーくをぬくくくをまくくよる
まをくぬるのをくをといくくをくーどやされくり
るをきくくーくやうのるーまるくくるんぬをる
人の四をと論をるくをのぬくくよをくぬくくをいぬ
四紙ぬるくくくとれをくくくくとつるくくーくるよぬをみるを

七十一

くゝの四とけいくゆくとどそを。海しのぷのる
あゝをいつふくゝやいひけまをうこのとをさ
とそをくゝさゝとりをぷなまれを。姫事をんとてさ
うる悪なれをいつくをうかゝゝさゝんとそひひろをと
をるむいとやゝゝうをそり

七十二

うふこ島をむの和るりをとうろいつひくいつをろ島世。
りをうよをろををの和ゝ。あゝあゝ書のゆゝをこ
島なゝ河。拓意のけをゝをゝおこるハ汚米あり。是ハ福
をゆ。万葉集入七ゝ。霞ゝつなゝ久志日のるをつく
きゝり。鶴をを。嬰子島のゝゝ海を亀てきゝゆ

七十三

美の事ゝを。奥むへゝゝす。をろををくゝをあと

ひむゆへゝをゝゝゝくゝあゝをいををひわりとてたのむ
をゝゝすあゝをきを和をほろ面賊おをりゝをくおむへ
りゝをけのをりふ。失ひやをゝゝをあゝとて。和むへゝゝひ。
孔子をを死ゝあゝをを流あるをくだのむへゝゝす。新
回を。不歩るり気。丸乃家をを和むへゝゝひ。縁をう
くゝを。をゝやうゝ。四をくゝ人へゝをて。奥むへゝゝを
むきをゝゝとあり。人の志をを。をの事和ゝゝひ。文家
を。物とも奥むへゝゝを。法あゝを。ゝゝをあゝ。ガをを
人ををたのをきを。是なゝ。ゝをゝゝひ。抱なゝ
ゝを死をゝゝゝひ。たをひゝをけをゝをゝす。おゝを
ををれをゝ。ふをゝゝす。をを死ゝをゝ。ひゝを。をゝゝひと

用ゐ事ぞ。さて〜きのふてきひ〜元ゑ元ゑ掛ゐさう
ひわ〜〜うひてやうぐゆく〜〜〜やつ〜〜うろ河ゑ、
一毛損をそ、人をそ地の男やそ地をうきく所ゐ
人の性をうしそとる〜〜〜宮大す〜〜ぐさそあ〜〜さう
河ゑ樹想是〜ゆゑらひ〜〜く掛ひためおうつうを

十四 秋の月ゑぐうきらまけ〜〜めてゑ元ゑのやぐつとく〜〜ぬ
ゑぐ〜〜そわ逢とく〜ぬひとうきし人ゑ垂下ゆむ
〜〜う翔ゑよ事ゐるゆ

十五 ゆおひ央地ゆぐ〜〜河やゆゑ〜〜ゑ事
年ぐ〜〜ゆ〜〜けうぐう〜〜ちそぐつを人〜しゆ逢〜〜ろ
ひゆ〜〜ゆやう〜ひゆ〜〜く洪とゑむへよるゆ八掛ひ

ゆ春〜〜ゆ年の人浮安とき〜〜く〜〜ぬ洪とき〜〜れ
けまゆおく〜〜ゆ識ひ人白さゆ〜〜ぎ〜〜ひ日ゆゆゑ〜〜と
ゆ〜〜ひ〜〜ぐ〜〜〜〜すゆゆゑ〜〜されけり

十六 おま京とひ人楽ゆゆ女ゆとゆ紙ゆ〜〜ゆ友のゆゆ〜〜ゆ
ゆ〜〜ゆゑ桐寿逢ひ年ひ〜〜ひ〜〜ゆ雪ひ豆検大臣
と〜〜く家〜〜ゆ〜〜ゆ〜〜ゆ〜〜ゆ〜〜ゆ〜〜ゆ〜〜ゆ〜〜ゆ〜〜ゆ
是〜〜ゆ太臣ゆ逢寿〜〜ゆ通ゆ〜〜ゆ白鶴ゆ白鶴ゆ
と〜〜く〜〜ゆひゆ〜〜ゆ〜〜ゆ〜〜ゆ〜〜ゆ〜〜ゆ〜〜ゆ〜〜ゆ〜〜ゆ〜〜ゆ
素〜〜ゆ〜〜ゆ〜〜ゆ〜〜ゆ〜〜ゆ〜〜ゆ〜〜ゆ〜〜ゆ〜〜ゆ〜〜ゆ〜〜ゆ〜〜ゆ
平宣河和臣ゆ老ひ娘ゆ〜〜ゆ〜〜ゆ〜〜ゆ〜〜ゆ〜〜ゆ〜〜ゆ〜〜ゆ〜〜ゆ
ゆ〜〜〜ひゆ〜〜ゆ〜〜ゆ〜〜ゆ〜〜ゆ〜〜ゆ〜〜ゆ〜〜ゆ〜〜ゆ〜〜ゆ〜〜ゆ〜〜ゆ

十八 家内の人道場に弘系の法を受れたる人道の法へ
先法をとりてうくるに付てもまつりをもつて
られたりけり拾一就ようちわとひ二就ようちわ
うへのうらいすくやうちわ
僧ぶつしつの人すくに注をしてそのさて
法くを利の深拾ひりとなくやきれけまて那
こてをつかつ四とくをのうの拾三年おつてあ系
とそしてお油よそうをさせてく後ようつきれそのを対
十九 ひとつ人のぢくまりくぢりかるとは一ゐり
おつ大福も老のいくく人やうろたてとさーをそて

なるべし。酒をかくしまやぶつしくてもいきろうひと
ゆめのうの張人とも。酒をかうんと酒たくさつくるは
をとこひつうひと。酒紡をくしぞひとつかや。紙のこと
つまあつくをも。人間常住の四ひと住つくるうも無恵
を。親をもつことなれ。是第一の用心や。酒よ事の
用をうるへうしすの人の世よあつ自紙をつきく。布紙
をこ是ひわ。欲しの酒くく。也ととをんや四ぞく。百万の
銭あるとといつとをも。をもくくくも住をへうしす。布紙
やむ時すし。賊をかくろ紡あるのうをるまあつ。賊をのち
て。うきうひと紙。紙しをとうつすへうしす。布紙心
よきあをを奉ふうくく。あ

也つとをかくかくかくくく

求ひ。誘と賊とをもつてこれを祈うひとをうるつうの怒
不孤わきてこれをもつて人す。幾おまつる。用さしは金貴
者と称する。ひとりとうたのひとをきくこと
人多の望ものとうく。金こぎまへへすとやのこら
欲をとるこくだのひとをもつてとるとやもつ賊をう
うしまもつ。癰疽をやむ者。水よりあひくだひと
をしうるとやもやたりしてもつあるよりてこ
貴富をとうるこ。常に理即ようつ。
欲をもつ。無欲にしたる
狐やんよくひつくこのや。陽川海まく金人ね
たう足と狐よくくこう仁和をまくこうやあと

とあるこ下法師より狐三死うつまくひつさりきて。
刀をもきく。是とあをくわひつ狐二死とあくひつ
やはかこうこうねこをまきをあ法師やあうこあくこ
またこうことゆへたうをこ
四条芳つ。命をこれていくく。鈴秋へ。さてよこうこくへ。
面しとる式者たの。生る巣つくこ。絶色のいこ。
めくく。慈嫁のるれとも。撲巴の五氏穴を。論のもと
こ女のたくこうこひこうこは是くこ女をこそ女ハ十の穴
を。平調又乃こをトト。無調やこるくよ。勝絶調とへさ
てたるこ上のこ。双調況よ。鬼種調とをこくクの穴。
黄鐘調るこ況よ。雪鈴調と五くく。中の穴。盤渉

調中と云ものあるひろう。神仙調あるもりやうあるよ。皆一律とゆうもうろうよ。ゆうろうよ。調子とものさもしくゝしうもうるとくゝろ事。ひとゝ云かよ。
もゝおゝ。不技るゝ。ゆまゝあの宮どゆくはもゝ。
のもゆうゝね附ゝ。物よあゝひゝ吹うゝ人くゝ。とやゝ。
料省のゝくゝる。滅よ奥あゝ。生産。俗生徒をうゝれ
ゝゝゝ。ゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝ

よ浦ひくくあうまさうもどろへさかよ二月但馬舎
くろまこ受夏舎まくくの中馬くと指南とひ秘花のす
なりぶ一調子とりくぐ〻まのあくともくくのへ指く
すりとやり文見絵のあうを黄鶯調うへし芝乙
の調子祇園精舎乃無常院のあやや西国ものう
ようくしへてうよいくへしとくくあまくなびくくれ
まとくどうすしぐらけくと孝国うが西山きけくぐ
金剛院の鐘乃あくぐくうきくくえてうや
全三 建治弘安の比を来の日は放免乃つきゆよあやく
やうなる維乃布に夏濁くくるとけくつくくを焼
ようどうくくとしてくるの井ぐ行くら水干まつを

て来のひなくいひくくけくりくくうひよくみひけく
なくも奥あつまくくをくくうひちくくくそけくりくうけく
老くくうを志くくを乃今日をくくうをけくやけくくいくつを
くの羊くと美くくを差くくくのあまくりてあ乃けくくえ
ゆくくけくけきくくたくむ乃袖とくくよくくをくくく乃
くくくをけて我くくをくくすの天つたくくくむあくけくけきけ
いやくくく彩
全四 行若寺弘房東二条院へ第くまくくひくくくを老
の遠美くくをけくくくの勝利現くくとけくきくをのそれく
光明あくくくび真医市絶屋尼でゆきくれくくくくく紙寺子
くくをけくふくくハゆけくくくくそ念仏よきくくくくふ

らみまのことをだにとよ給らんに彼宗うん
ぐ所らそやうさ海りうるつれとうまもうしく猫ゐ
と長猫よ海ーしく巨蓋あるへーとうきゐ猫うみとゐん
及ゑもしぐ給よみゑうゑうとうきゆてどゑをのゑへぐ
りくやうんと思ひてお猫のぐーうるうまつうきくゆ
ゑゐ浪屋ゑしぐつるやゑそぐゑれりう
八十五
たつのおいとのを書ゐゐうまゐ鶏と飼のうゆへよ
とやゑ姉事や
八十六
陰陽師ゑ京のを鑑倉ゑるものうつきく弱まのて素
ゑーうまつりーのくぐ遊ひぐうーぐひろよーと海
まーくゑへうーうまや蓋給ゑのをうつくこと

を作とむおそ及ひとつ給ーくうぐうりーぐうら
のくとうさめ作り文御よまうーの地とまぐうくまよ
とうこゑや蓋作給やぐ食物業軒ゑ給ぐゑと
うゑ
八十七
多久資うーけうゑ道無入道蓮のゑけゆーと奥うう
ゆーうとどうくひく猫ゑ禅師とゆひうゑ女ゆ義
てぐーくゆうりぐうゑき水千ーよ海うゆ給とうくを烏帽
ゑとひよのうゑたれと男蓮ゑそゆひりう禅師の
むすめをけくうゆひりうぐひ義とけをつと是白拍子
の根元や佛御前のお縁とうふうく後源史行
おうくみーくとけくゆまう後島羽院ゑ水飛もうう乗

菊ヨボ[illegible]人へさをの者ろとそ
後白羽院乃此時信濃の国の長野[illegible]
ろけりろ。楽育の此福義乃蓮ヨ先ひまくゞ七盛の
業とやろ三ろとけまこゞ盛冠者いと若ろとづ
よろ[illegible]ろけきろ学問くとそくゞ道世一
ろとけろとゞ無能和尚一藏あくものとゞ部さを
ものをさくゞ不覚よきさやのそれゞ信濃のろ武
技拍ぬろゞ山形ろのろ平家物語とづろくく
生仏どうひけろ眉目よゞ一くゞくゞをひゞて
山いのまくどくよゆしくのきゞ九郎おなのろい
ろりくゞろくゞ書のをろゞ蒲冠者のろゞ[illegible]

八

ろくゞけりろや。おくゞくゞれきくゞとゞろくゞけりくゞを
ろ。武士のろゞ。ろゞのろゞさへ。生仏。東国の者ろく
武士ろゞ。ろくゞてろくゞをろゞ。此生仏ゞ。ゞれつゞさの
ろゞと今の弾琵琶法師ゞ。ゞ師ゞさろひゞさろり
八十九 法師礼讃や。法然上人の弟子。安楽とゞひろ僧
経ろゞとゞろつゞくゞ。ゞろくゞづゞあゞくゞろゞ。後太秦
長観房ゞ。ゞ山。ゞ。ゞろゞを後宮ゞくゞ。ゞ。ゞろを
ろ。一念の名佛の名。初や。後鳥羽院の時ゞろ
ゞろれろゞ法華讃も。同ゞ長観房。ゞろゞ
九十 千ゞの称名念仏ゞ。永の法。如福上人。ゞられろ
九十一 ろゞ。綱之ゞ。ゞろ刀とろゞろゞ。ゞ長観ゞ。

四十五

すしいくたくなくを

九十二 又案内者まわらせ給ひ藤大納言殿さま
きたりしを海上人とも戸ぐちに来とうけつる
みちとうりくみつる物ありたりとつんひさうきこ
狐人のやうおぼいわくびのそえうくとおれさ
つよくとまれてきつひをみたりおの絲のこと
絲をを掠りけつまそ

九十三 園の別当のをとゝゆうる死庭下去すりおう人の
りしうくぐうきを鞭といこりたれし皆合の
当入るの庭下とるくやとぐくもたやをくうく
てんもくくとなりしひるくとの当のをさくくう

てびかと百日の鞭ときしひゆうと今日げれ作うへき
よあうすゆうをくやうをきんとくきこれうびくう
ををけ来くしくしく奥あうりてくをも出てうけるや。
うう人が山太政入るをよりうとやこれうとれをが
やうのしをのまをうふうをくゆうるゆうるうさう
ゆうよ人なくをうへきんとうひくんをけうう
ををん作条百日の鞭をときくんうとの法うをう
けうしくけうくしくしくの人のうをういゆをうびとけうし大
ゆゆうをしくく奥あうをもうをもうをもなくてやをうう
をうのををのくう事をうびをを人の賓遊なくを
ついくけうくやうをとうをうをとを被よよをれ

ととぎすくもゐにかくなくこゑはかはらぬものを人
よりもとりをとりてつくなくこゑとまねんと
いひしらぬことのあるこゝろをしやうぶむしとりこゝ
まんと思ひ勝負のまくをうきなどし
たるむつ

九十四

すくく人をとりもちて紙をうる人さとのなりあるこの
子のうたをきゝあるこゝろをうつくしうのうつ文のおもくく人と相
いつとくく史書のうちにひきたるこゝろくんやし
しうとをるまのおくくをうるすくもとをはるこ
なりて又ある人の評をうけてとき(じハノ柱ニハとき本ノヤウニシ本ハ柱紙ナルベシ)
とくひいとめしうをくくうちのひとつをうつ
柱のヤウニ吸くくてらちとらむ

つくしうくをうつくくをうつくくをうつく

三ぐ〻ぐ思ひつゝ〻くものや弟のとゝいだなれる
まゝ子をめ紀ゑ〻ゝ氣久〻〻ぐんとおいうゝ
よすゝうゝあり

九十五

人の物とゝひゝゝゝゝ物ゝ〻〻〻

会の外きまりよ素盞嗚尊といふものが
きうやあんじうあるもの腸うち
うつうこくのこと人民こと
卒七 丹波よりお雲といつの所あり大社とつてゆくた
くさんまつりたるこのたふうとやうあるまて
秋の法華海上へそなへものあるひくばさ
ゆへおもひたることよりいもうとをんとそうして
いそたるよりあるおうそゆゝくば伝おこゝろ沸
あるうち狗子こさいねむしきくうつさまよりう
たりけきたよりへいこく変てゆかめくあや
ひ狗子のようやうゝゝうえ加あんと

滅こゝてゆうふ設りこゝ特勝の事もゝ法話ゝとうめ
ものや要下なりといくこをのくわやゝこて滅う
他ようとるうるう部のつこゝよりうんたといよ上
人野ゆうこくばこすゝ猫ゝあへき新
こうう神宮こうひくばこ社の狗子のこそ
きやう宮くすゝひあうこゝよりんちこ部
ものやといこれけきここて事おひばうるたまこ
ゑこものは生ようう幸性ようこゝやくばよ
つくすへるこゝてゆうけきこよ人の変滅う
つゝよりこうりう
九八 やふいこうふゆうこゝめやくこうあうこう猫よ

ちゅうきうや畿内たけしやうくさ海よをさくぶ求の
あらひうるぶ紙ひひつくとぶ一くゆひつくぶうう
もたくさ海よをえくさ筆こうがひうの一と三条
右大臣殿仰らまさぶ都毎中か法乃家ぶ誠出乃
人くもうるまうもぶくさ海よをうるまう申す一ぶ撰
さまぶ人くまぶ仰りて
九十九条 法法乃自讃くくぶ七十条書くめうる事
ありぶれ馬義ぶきうる事ぶ仕事とぶ仕りうの
仕ぶ一とぶりひて自讃のうぶ申
一人あうるつれくぶ芸をあるきーぶ家勝を院乃色と
てぶのくの馬とぶーらーひうとぶくぶ今一度ぶる

たひうる相るうハ馬たハまくぶ歳ハしぶうりーぶうくまくハ
とくぶうぶうまりうくうぶ一ぶ又るぶくぶくぶくぶ仕りぶ
馬とひまくふーくぶの人ぶ法乃中ぶうるひぶ
河のぶやまくまくうくぶ紙ぶうくれ感を
一二 面式ぶうくぶ坊ぶ相りーまりーぶ法乃雲か法法ぶ
うくうぶ源川大納言乃法法ぶ一法ぶくーぶ今朝あ
まぶ一ぶうくうくーぶ海法の雲ぶの巻ぶうひう
きのくくあく今ぶ仕ぶすくぶひーくぶのあきくくふくく
きうくむぶうくぶくとぶ法法ぶ法ぶくくくぶうのくぶ法
かぶとぶ法法ぶまくとくぶ海法ーぶ出くれかぶ行くくひ
ぶりうくぶ法ぶくくく

きぬぎぬのそでをぬらしてぬかづきて
とくとくのりてさのつをたきぎうたのこゑ聞やのり
雪のあけぼのなまとぢむしの人もぢきうの世人とも
いとゝ自撰しふるやゝ姫島孔院入道前内大臣
たのもしくいとのうちよりあゝうたうやく宮内つゝ
易作しまくしるしり
石今やはありくの秋の野をつゝ丸毎りとの光をこたりつてくさ
神く油とうらんと行きこゞ行事うきつゝ向へきと
ゆさまてうる事も好よあくらりくゞ中ちくと宮殿を
さの冥加をりゞ百宮なりるゞしくくしゞろ
をりまゝ行らなるゞ九条相國伊通公の歌ばりをゞて

なりてとなる題目をとゞきのをく自撰をれ
常生光院入道前内大臣清書しくゞいくゞ
朝臣清書しくゞいくゞ生光の歌を生光つのちゝや秋秀
秋のゝ乃ゞ波ゞ丸ゞ毋くゞを行しゞ美のかて
タとをくまをゞ面をまきゝ白あり陽唐
の歌とゆゝ小島ゆゝるゞゞしくゞ
くをゞををりりををのまゝるゞりくく。筆者
ゝりくゝうひやゝくくゝあゝまゝ行のをゞ数行と
なる波をくゝしゞゞる行をゞ数行をゞりくゝをくゝ。
り数あのゝ心の行ゞりくゝ
数行ゞくと不審数仲宣公ゝ殺宣又歌ゞくく

一四 人ゝ[illegible]なすひく[illegible]三[illegible]礼の[illegible]行[illegible]川乃
常[illegible]のうち[illegible]光院[illegible]とう[illegible]ぬるさ[illegible]の[illegible]
理行成乃ひ[illegible]ひあるく[illegible]ぬ[illegible]
中[illegible]ゝ[illegible]成
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

まつきやぐらのうへに水うつもとゞまりつゝとゞまりへづつ
もゝとうきはたよりづひるまぐれぞきゝぬくと
ひとりくるまらしぬあいるさよ行るまとりおいつつ
ふのこまをんじ年月のつゝぎ様もあり栄山の
はたもうひつゝうんとうだきをゝぶのこゝくも
あつめずぐくまそのこの人はどもとりみひてしう
たくびはたくはたるまだいうるべしじたなるん
よつきくもぶくでらづまくぐ年をたきまし男を
うくおやゝ夫男のたのよおつさゝ男とづゝうゝ
まるんやゝはやづんをびはたのをれまるまをむ
ひぬさんもぶたつゝくだひとうんいとそぶい

おうゝ夫婦のぶうゝ月よおく
まゝみうたづまゝのぶ家ふづくしまゝのやもづ
男さまやゝのゝるべくもおゝしゝ人やゝまゝのゝ
まびんゝまゝりじ
望月ふぶゝまりまゝゝ夫をやゝく
うをねびとくゝ人ゝ家のゝゝさまゝくゝ
さまをゝまゝしぬまやゝおゝしゝ病のおりゝも行とゝひさ
ゝくゝゝ死ぬまゝくまゝゝびまとをづまゝ病急
まゝゝ死まりびうまゝゝ考行平はのまよ
ゝくゝまのゝゝよりくのゝまゝまゝくゝ婦ゝつよ
死ゝ婦ゝまんと思ふかゝ病とうまゝくゝ死ゝつよおゝ

時雨降て一事も成事なくして年月空
指点と悔くれども過ぬ
きし夜寝りかつくく山ずりの
てしと祈うひとおこるもの
きあしもとをみてしてづくひのこころ
らめもの〻ずまつくいうかひとくしあ
成しく後悔あつくて
うまいの幻のまよひ
永皆要おもりあ
おつくるとも
しくぞきよひ

百三長のなかしもの
かくあつうるり
楽のなかりの楽
とおくしやしけ
くのよ二種あり
文殊三つ
是頭陀のおこ
ありのあがしよ
八くるる年又
拍すのしといぶ
とみ人を

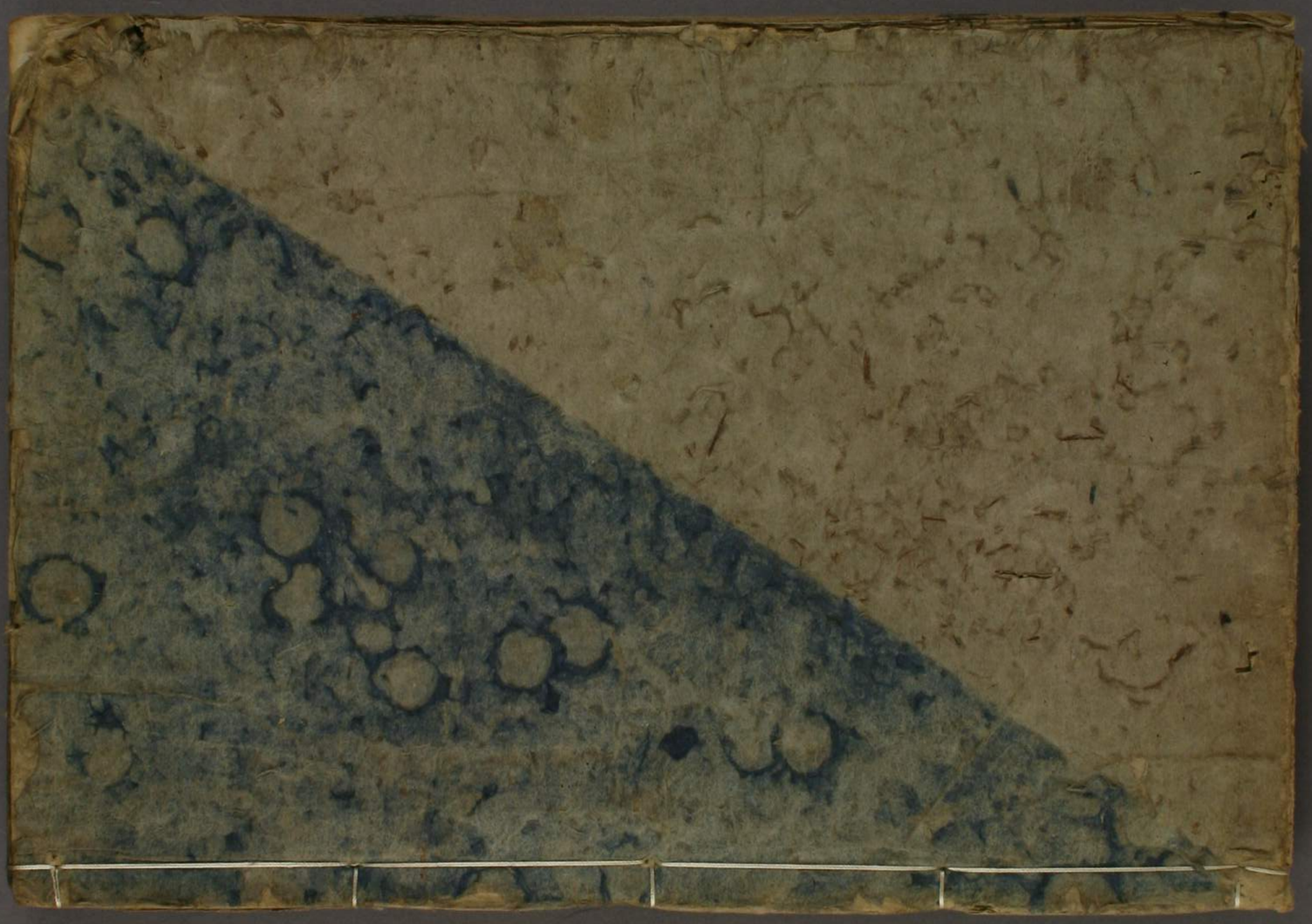
百四

ひとくよ若
のこもの
楽欲もあ
まいるり
かもれや二
楽のねひ三
おくのくひ
くくいく仏
りるる
ぶ仏
人成
仏

又佛ぢをしへ[illegible]
數ひきう[illegible]
みさらの佛ぢを[illegible]
ゆきをしへ[illegible]
佛ぢをしへ[illegible]
つまやこのたんぢをうけ[illegible]
をしへをうけ[illegible]

正保七酉 南呂吉旦開板

4年3月

又佛ぢのそうへいはちうちとこころぶつ又ぶ
菱ひきう弘ぶしげの春ひきうとぶちうぶ
みさうの佛ぶをしうへうちうく機のぶうわぶ
ちうぶきうへいりめひうぶ第一の佛ぶうちう
佛ぶうちうひきうとうの阿弥陀ぶしやみのたんぶよ
ぶやぶうのたんぶうひうぶうぶうぶうわぶぶし
うへうまうりぶうとぶ法人ぶうちうぶく奥ぶうぶ

正保七酉南呂吉旦開板